



**50th Anniversary Of  
Simon & Garfunkel DEBUT !**



**Simon & Garfunkel  
Web Forum  
Off-Line Meeting 2014**

## MENU 本日のメニュー

### ■ オープニング

### ■ こうもり&けんご

Crying In The Rain, Bright Eyes, Wednesday Morning 3 A.M. ,  
American Tune, ほか

### ■ BP&MEVA&KAZU

He was my brother, The sound of silence, Hearts&Bones

### ■ 大口さん

America

### ■ 松月 &S+G

Hobo's Blues, Duncan

### ■ 自己紹介タイム

### ■ S+G

Go, Tell It On The Mountain, Bleecker Street, Feuilles-Oh,  
April Come She Will, Something so Right, Richard Cory

### ■ ひろみつさん

The Boxer, So Long, Frank Lloyd Wright,  
Bridge Over Troubled Water

### ■ 東山さん

The Side Of A Hill, Overs, Peggy-O, Song For The Asking,  
Peace Like A River

### ■ けんさん

The Times They Are a-Changin', At The Zoo, Punky's Dilemma,  
Congratulations, Feelin' Groovy

# My dear Singer, my dear Songwriter

In the year 2014 that is 50th anniversary of Simon & Garfunkel Columbia Records debut

Yoichi Oguchi

Fifty years. Your music brightened up my life.

Your voices are clear and words are intellectual. Nice rhythm loose hearts, good selected words stipulate brains. Some of us, fans, have been listening to you 50 years, some 30 years. Though generations differ, we spin threads.

Life sometimes fell in darkness -- Hello darkness my old friend. Another Old Friends toured and came to my town and I saw the pretty light. In the darkest night there is a light beyond – you proved.

With music, life could be better. Break-up sometimes occurs. And reunion creates another seed planted.

Fifty years, going duo or going solo, it is your choice, we enjoy the music you create. Please share the park bench.

Fifty years. Records change. Black discs replaced by silver discs and now pocketful of digital gears running. What's next?

My singer, whatever troubled your voice, all fans have been waiting you recover in a perfect moment.

My songwriter, pursuing something new is natural. Please never change your point of view. Your music is not easy for me to play, you always give me higher target, thanks.

We, fans, awaiting for next your release, new or old materials. There must be fifty ways to create next one.

Yoichi Oguchi, Nagoya, Japan

yoichi.oguchi@gmail.com

一応、日本語訳（英文を読んでくれたようが歌詞からの引用がよく分かるかと思います）：

## 親愛なる歌い手さん，親愛なる作詞・作曲家さん， サイモン&ガーファングルのコロンビア・デビューから50周年の年に

五十年も，あなたたちの音楽が人生を明るくしてくれた。

あなた達の声は清らかで，言葉は知的。すてきなリズムが心を緩め，選びぬかれた単語が脳を刺激する。わたしたちファンの中には50年あなた達を聴き続けたものもあり，30年聴き続けたものもある。世代は違うが，糸を紡ぐ。

人生は，時には闇に陥る，古い友だちにこんにちはを言う。別の古い友達が演奏旅行にでてわたしの街にもやって来た。とても素敵な灯りを見た。闇夜の向こうに光があることをあなたたちが証明してくれた。

音楽があれば，人生はもっと良くなる。別れは時として起こるものだ。が，再会はまた新たな種を植え付ける。

五十年，二人で行こうと一人ずつ行こうと，あなたたちの選択。わたしたちはあなた方の音楽に夢中になる。どうぞ公園のベンチを分けあって。

五十年，レコードは変わっていく。黒い円盤は銀色の円盤に替わり，いまでは，ポケット一杯のデジタル機器が動いている。次は何か？

わたしの歌い手さん，あなたの声にどんな問題が起ころうと，ファンはみな完璧な瞬間にあなたが回復するのを待っていた。

わたしの作詞・作曲家さん，新しいものを追求するのは自然なこと。その視点を変えないで。あなたの音楽は演奏するには容易でないけど，高い目標を与えてくれたことにありがとう。

わたしたちファンは，あなた達の次の発売を，新しいものであろうと古いものであろうと，待っている。次の作品を仕上げる方法は50通りもあるだろうから。



# So Far Away from his Home — Paul Simon in Taipei 2013 保羅賽門2013臺北演唱會觀覽記



BlankPaper



このコンサートが開かれたのは、2013年3月20日なので、本来ならば、昨年(2013)のオフ会パンフに載せるべきレポートだが、昨年はオフ会直前の時期が忙しく、つい、さぼってしまった。編集人からオフ会当日、批判をもらった。今年はきっとPaul & Sting Tourのレポートや、アーティー復活、来日の話題があるのでやや出遅れた感があるが、このコンサートのレポートと渡航顛末を寄稿したいと思う。

2013年が明けた頃、ポールのアジア・オセアニアツアーが発表になった。その時点で参加の可能性が高いと思ったのは、シンガポールのフェスティバルだったが、遅れて、日本から最も近い、台湾（台北）でのライブ予定が発表になった。3月20日。日本は祝日（春分の日）の金曜日。しかし勤務先の大学の卒業式当日である。専任教員であり、重要な学事日程であるため、欠席するわけにはいかない。しかし、行事自体は午前中で終了する。夜に予定されている記念パーティーは、ゼミを持たず卒業生のいない私には無縁のものでもう数年間出ていない。都内の勤務先から直接羽田に向かい、午後の便で台北に向かえば約3時間半、夕方には着ける。コンサートは台北市内、地下鉄で行ける範囲で、午後8時開演。十分間に合うと踏んで参加を決めた。

まずはチケット入手である。「参加を決めた」と書いたが、実際はチケット発売後もかなり逡巡していた。日程が厳しいこと、チケット代が高いこと、知名度があるとはいえない台湾でのコンサートは盛り上がらないのではないかと考えたためである。欧米のコンサートは現地の大手チケットサイトから日本からでもネット経由で購入できる場合が多く、クレジット決済して現地でカードやパスポートを見せれば、チケットが受け取れるという場合が多い（最近ではオランダなど、日本のような外国発行のクレジットカードでは決済できない国が増えてきた。犯罪防止の意味があるのだろうが不便になってしまい残念である。）。しかし、台湾のチケットサイトの販売方式は日本に近い方たちで、発券がセブンイレブンやファミマといったコンビニ発券となっている。

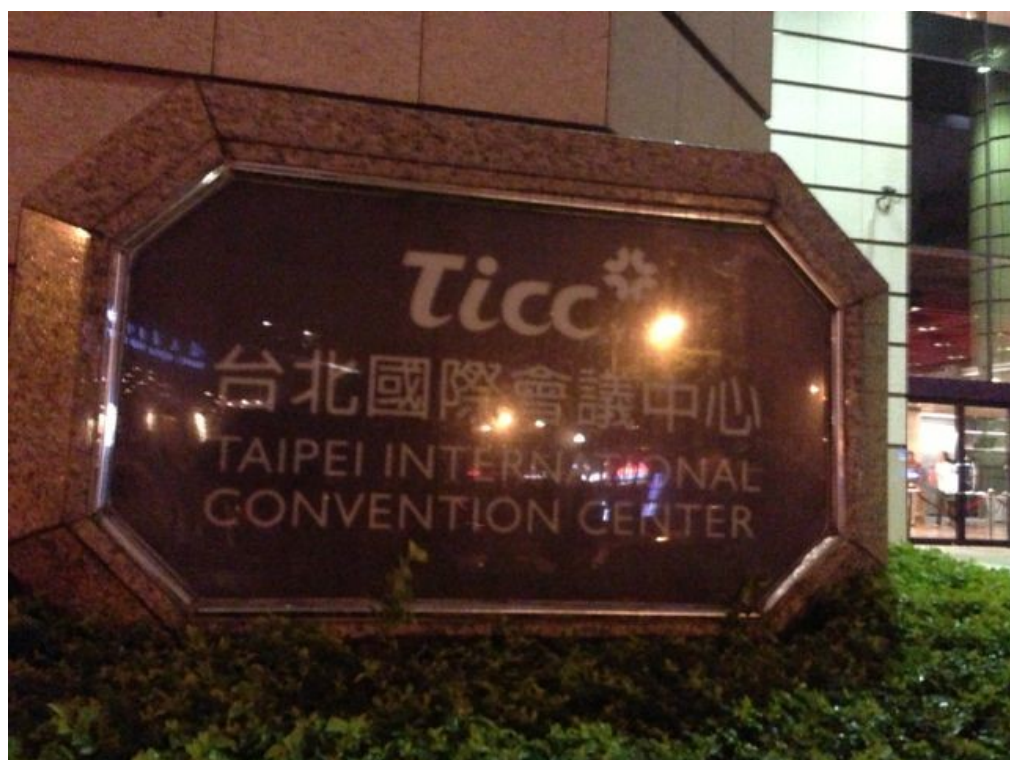




もちろん台湾国内のコンビニであるため、日本からの購入は不可能かと思われたが、よく見ると電子チケットの発売も行われていた。インターネットで決済し、スマホにダウンロードしたアプリで電子チケットを受け取るというもの。これなら日本からでも購入できるのではないか。サイトの中国語には苦戦したが（学生時代必修ではない「第三外国語」として半年しか勉強していない）、ウェブ翻訳に助けられながら、メニューを進めてみると、どうやら国外からも購入できそうである。座席指定までできるのだが、チケットは発売後もあまり売れていないようで、まだ二列目さえ残っている。最前方のVIP席のチケット代は日本円にして3万円以上。台湾の物価を考えるとかなり高額だろう。会場は3000人の規模のホールだから、日本でもその規模でやるとそれなりの額になってしまうのだろう。

このポールのギャラの高さで人気のバランスがとれないことがソロの来日を阻んでいることは明確である。（同じポールでもポール・マッカートニーは1万6千円で東京ドームを満杯に出来るし、10万円の武道館チケットさえ売れるのだ。こっちのポールはS&Gであっても、ドームを満杯にできなかったのだ。この差は厳しい。）こっちはわざわざ日本から行くのである。ちょっと苦しいが2列目の席を購入した。スマホへのダウンロードも成功。開くとバーコードが出るようになっている。よしよし。準備万端で3月20日を待った。

当日の東京は曇り空。予定通り、大学の研究室でスーツからラフな格好に着替えて（スーツは帰国までロッカー入り）羽田に直行。無事飛行機も飛んで台湾に午後5時頃到着した。東京に国際空港として羽田と成田があるように（成田は千葉だが）、台北にも2つの空港がある。市内に近い（というかほとんど市内にある）松山空港と郊外にある桃園空港である。往路はできるだけ移動時間を少なくするために羽田＝松山空港航路を利用した（帰路は桃園＝羽田である）。空港のロビーに出たとたん、むっとする。気温は27度くらいか。湿気も多い。日本ではちょうどよかった薄手のハーフコートもすぐに脱いだ。現金の両替をして、タクシーに乗り市内のホテルに向かう。タクシーは日本語も英語も苦手と聞いていたので、プリントした地図を運転手に指し示す。20分程度で到着。チェックイン。ここは日本語も英語も通じる。近くのコンビニで日本と似たようなおにぎりや飲み物を買って、食事をした。少し休んで午後6時くらいにホテルを出発、地下鉄で会場に向かう。





「台北國際會議中心」Taipei International Convention Centerが会場である。有名なタワービル、台北101の隣（というか麓のように思えるが）の建物のようなようだ。ホテルからは地下鉄を一回乗り継げばたどりつけそうである。台北の地下鉄は出来て日が浅いのか、たいへんきれいだ。チケットがプラスチック製のコインのようなかたちになっていてこれを自動改札機に投入して乗る。週末の夜とあって、かなり混雑していた。それにガイドブックには2012年12月開通となっていた、会場の最寄り駅がある路線がどうもまだ開通していないようだ。結局別の路線の駅を降りてからかなり歩く羽目になってしまった。暗くなったこの時間でもビル壁面の気温掲示板に表示された気温は27度。3月の東京から来た身には歩くのも結構キツイ。どうやらこうやら会場にたどりついた。が、どこにも「Paul Simon」と書かれていない。入り口の係員の女性に「ポール・サイモン？」と尋ねてみるとそうだという。

「台北國際會議中心」Taipei International Convention Centerが会場である。有名なタワービル、台北101の隣（というか麓のように思えるが）の建物のようなようだ。ホテルからは地下鉄を一回乗り継げばたどりつけそうである。台北の地下鉄は出来て日が浅いのか、たいへんきれいだ。チケットがプラスチック製のコインのようなかたちになっていてこれを自動改札機に投入して乗る。週末の夜とあって、かなり混雑していた。それにガイドブックには2012年12月開通となっていた、会場の最寄り駅がある路線がどうもまだ開通していないようだ。結局別の路線の駅を降りてからかなり歩く羽目になってしまった。暗くなったこの時間でもビル壁面の気温掲示板に表示された気温は27度。3月の東京から来た身には歩くのも結構キツイ。



どうやらこうやら会場にたどりついた。が、どこにも「Paul Simon」と書かれていない。入り口の係員の女性に「ポール・サイモン？」と尋ねてみるとそうだという。

とにかくロビーに入る。iPhoneのバーコード画面を出して、キョロキョロすると、電子チケットコーナーらしき場所があった。そこでチケットをチェックされて左手の甲にスタンプを押してもらう。野外ライブなどで時々あるヤツだ。それにしてもチケットのもぎりもなく、チェックが甘い。ホールに入る。印象としてはなくなってしまった東京厚生年金会館くらいの感じがした。（実際調べてみるとここの座席数は3100席。厚生年金も同じくらいだったと思う。）開演まで時間があるのでまだ客席はまばらである。（このままだったらどうしようと思ったが開演までにはちゃんと埋まっていた。数日前にどのくらいチケットがはけているかネットでチェックしたのだが前方の高額席はまだかなり空いていた。当日前方席に座って全く盛り上がっていなかった方々は……？）

次第に席が埋まってくる。まわりを見回すと、やはり客層は中年以上という感じがする。後方席には若者もいるが、かなり高齢の方もいる。ほとんどが地元台湾の方だと思われるが、隣の数席は50代くらいの西洋人（白人）の方々だった。駐在のビジネスマンか、外交関係の仕事の方か？この人たちも開演後、全然盛り上がっていなかった。後半、〈My Little Town〉が始まり、思わず立って手拍子を始めた私に冷たい視線を投げかけてきたのも彼らだった。



同じ西洋人でも最後の最後で盛り上がってステージ近くまで降りてきて踊っていたのは、後方の安い席で見ていた年齢の若めの人たちである。

開演前にS&G2009日本公演などでこちらのオフ会メンバーと親交があった、ツアーマネージャーのアダムが他のスタッフと歩いていたのだが、私自身は面識がないので、話しかけるわけにもいかなかった。ステージチェックに一応面識のあるマーク・スチュワートが出てきたので、ステージの下から「ハイ！マーク！！日本から来たよ！」と声をかけてみたが、こちらが暗かったせいか、彼の視力がよくないのか、声には反応したもののはっきりとこちらが見えたわけではなかったようだ。会場の中も携帯の電波は入りまくり、直前までツイッターができた。

そうこうしているうちに、午後8時。開演予定時間通りにライブが始まった。バンドメンバーが入ってきて位置に着く。ポールが入ってくる。〈The Boy in the Bubble〉イントロの響きが台湾に初めて響き渡る。皆、元気そうだ。

### セットリスト

- 1 The Boy in the Bubble
- 2 Dazzling Blue
- 3 50 Ways to Leave Your Lover
- 4 Mother and Child Reunion
- 5 That Was Your Mother
- 6 Hearts and Bones ~Mystery Train ~Wheels
- 7 Me and Julio Down by the Schoolyard
- 8 Slip Slidin' Away
- 9 The Obvious Child
- 10 The Only Living Boy in New York
- 11 So Beautiful or So What
- 12 Diamonds on the Soles of Her Shoes
- 13 Late in the Evening
- Encore
- 14 The Sound of Silence
- 15 Kodachrome / Gone at Last
- 16 Here Comes the Sun
- 17 Gumboots
- 18 The Boxer
- 19 My Little Town
- 20 Cecilia
- 21 Homeward Bound
- Encore 2
- 22 You Can Call Me Al





以下、ライブ中の記憶をたどりつつ書いてみる。一曲目が終わり、ポールが話す。「これは台湾での初めてのコンサートだよ。ここに来てとても嬉しい。」「君たちはどこから来たの？台北？」ポールは、香港や東京、ソウルなどもう少し広範囲からの観客を想定していたのだろうか？

ポールのソロ曲が続く。観客はきっちりと静かに聞いていて、終われば拍手をするのだが、いまいち雰囲気は暖まらない。最近のアーティストのライブならともかく、ポールの場合、アップテンポな曲が多いし、欧米ではすぐにノリノリになるのだが、それがないのでポールもバンドメンバーもちょっと調子が狂った感じだろう。東京や大阪でさえもう少し盛り上がるはずである。〈あれ、盛り上がらないな、楽しんでないのかな？〉とメンバーたちから、アウェイの緊張感が伝わってくる。6曲目の〈Hearts and Bones〉のイントロでは、珍しくポールとマークの呼吸が合わず、イントロが少し長くなってしまった。これもアウェイ感が原因かも知れない。

開演前に、注意のアナウンスもなかったのが、途中からこわごわ、デジタルカメラの動画を撮ってみる。最近のポールのヨーロッパライブでは完全に解禁ではあるが、台湾という国柄がわからないので、注意されたらやめようと思ったが、特に何か言われるということもなかった。

こうして盛り上がっているのかいないのか、よくわからないままに（笑）ライブは続く。ポールの歌と演奏、バンドの演奏は極上である。ほとんど全てが2012年のGlaceland25周年ツアーの生ライブや映像で見たことがある演奏ではあったが、たとえば、〈The Only Living Boy in New York〉ではマークのチェロ演奏が加わっていたり、とアレンジや楽器は微妙に変わっているようだった。



最初のアンコールの中盤、〈The Boxer〉が終わった後、ポールがマークや、キーボードのミック・ロッキーと耳打ちをする。「じゃあ、S&Gの曲を（続けて）やるよ！」。マークが他のメンバーに大声で伝えている。多分ここで予定していた曲を変えたのではないかと思う。〈My Little Town〉である。今回のアジア・オセアニアツアーのレポーターには入っていたが、台湾では（日本でもそうだが）やはりS&Gの知名度の方が圧倒的に高いと聞いてはいたのだろう。ここから〈Cecilia〉〈Homeward Bound〉とS&Gナンバーを続ける。〈Homeward Bound〉に入るためにポールがギターにカポを付けている間に会場から「〈Bridge Over Troubled Water〉！」と声がかかる。発音からして英語話者の観客である。S&Gといってもやはりこれを聞きたいという人が多いわけだ。ライブ前に台湾で流れたコンサートのコマーシャルスポット映像を見たが、なぜかS&Gの映像になっていたし、プロモーターも最初は台湾の需要から考えて、S&Gを呼びたかったのかもしれない、とふと思う。しかしアーティストが歌えなくなり、しびれをきらしてポールのソロ公演を招聘したのではないか。そうであればなかなか厳しい話である。こういう立場のポールはある意味なかなか見ることはできない。申し訳ないが貴重なものを見せてもらったと言える。（日本へのポールソロ来日の厳しさも感じざるを得ない。しかし、ポールと彼のバンドは超一流である。日本で、高くてもいいので小さめの会場でライブを行ってくれたら、と思う。）

二度目のアンコールで、メンバーたちがステージに戻ってくる。アコーディオン、キーボードのトニー・シドラスは大きく両手を広げて、「どうしたんだい？もっと盛り上がれよ！」というようなアピールで楽器の前に座る。アフリカ出身の彼やバキチ・クマロにとってはこういう静かな聴き方は論外なのであろう。最後は〈Call Me Al〉。今まで我慢していたのか、後方席で盛り上がっていた人たちが通路を降りてきてステージ前で踊り始める。係員が必死になってステージに近づかないように止めている。欧米のライブであれば、屈強な体格の男性ガードマンを配置するのだが、こんな事態は想定していなかったのか、若い女性係員が必死に両手で止めているのが、かわいそうだった。踊り出した人たちも、さすがに係員を押してステージに殺到することはなかった。一部だが最後は盛り上がったので、トニーはじめメンバーは大笑い。楽しくライブは終了した。約2時間、ポールもメンバーも大変素晴らしかった。外は雨が降り始めていた。2012年のアムステルダムに引き続き、ポールのライブ終演後の雨だ。しばらく会場周辺をうろうろしてみたが、メンバーに会えることもなかったのので、タクシーを拾ってホテルに帰った。

せっかく台北に来たということで、もう一泊して、映画で有名な景勝地「九份」や、「白菜」が来日して話題になっている「故宮博物館」などを見て、3月22日、帰国した。ライブを撮影した動画は今でもYouTubeにアップされているのでご興味のある方は検索してみてください。

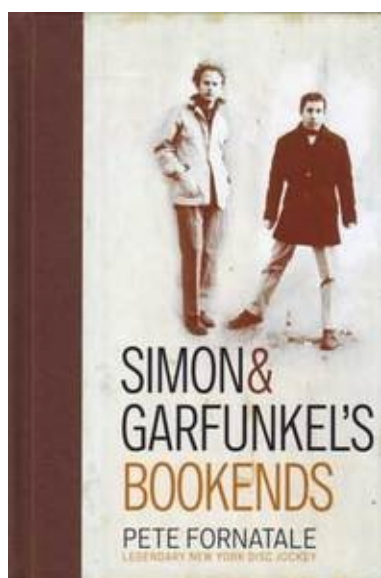




# SIMON&GARFUNKEL'S BOOKENDS

## PETE FORNATALE

### 3 FORKから4 FORK ROCK冒頭部分の試訳



## 訳：ようこ

SIMON&GARFUNKEL'S BOOKENDS PETE FORNATALE P25-41

### 3 FORK (フォーク)

ミュージック・ビジネスは常に流行や熱気に敏感だった。思いがけない独創的な大ヒットは直ちに同じ鉦脈を掘り当てようとする一千もの模倣者を招いた。ロックンロール後の最初の大きな潮流は1950年代の末期の数年間に現れた。最近亡くなったシンガー・ソングライター・インタープリターのデイヴ・ヴァン・ロンク(1936~2002)が、そのことを『the Great American Folk Scare(偉大なるアメリカフォークパニック)』といたずらっぽく名づけたものだ！ 機知に富み、辛辣で、知的であり、本物の人たち、本物の問題、本物の文化的伝統を扱った音楽の復活だった。そして必然的に、ポール・サイモンとアート・ガーファンクルも惹きつけられた。

フォークは民衆の音楽だった。そして一般に信じられていることに反して、美術館の資料室に収められた骨董品ではない。フォークミュージックは常に我々と共にある。単に認知の程度が上下するだけなのだ。男女が人生、愛、人間のありようについて表現しようと韻文を曲にするときには場所や時代を問わずフォークミュージックは命を持つのだ。そしてそれは何世紀にもわたっての流れであった。ブリティッシュ・バラッド、スコティッシュ・リール、部族内の詠唱、単旋聖歌、賛美歌、詩編などはすべて要するにフォークソングなのだ。移民たちは地球のあらゆる場所から、自分たちの文化や民族音楽を新世界に持ち込んだ。そして一度そうなると、そのサウンドは混ざり合い、変化し、成長し、多様化した。ワークソング、プロテストソング、歓喜のピーアン、哀悼歌、プリズンソング、ハラール、ラブバラッド、レイバーソング、カウボーイソング、それらはすべてフォークソングであり、サイモン&ガーファンクルの素晴らしいディスコグラフィのように、伝統的な形式や、時には最新のスタイルで出現するのだ。

フォークのアメリカ音楽への即位については、多くの20世紀のパイオニアたちが挙げられるが、1912年7月14日にオクラホマ州オケマーに生まれたウッドロー・ウィルソン・“ウディー”・ガスリーほどの影響を与えた者はなかったと思われる。ウディーはアメリカのフォークシンガーのイメージシンボルだった。鉄道利用の吟遊詩人、支配者層を歌に取り上げ、自身のギターとバンジョーに『このマシンはファシストを殺す(This machine kills Fascists)』と殴り書きしていた。(1950年代になり、後に続くパフォーマーやミュージシャンにも採用されたスローガンである)

フォークの隆盛は、元はリー・ヘイズ、ミラード・ランベル、ピート・シーガーを中心としたトリオである、アルマナック・シンガーズに大きな前進をもたらした。彼らは1年後、ガスリーの加入を受けてカルテットとなった。

1941年にレイバーソングのアルバム『トーキング・ユニオン(Talking Union)』を、1942年初めに、第二次世界大戦を支持する『ディア・ミスター・プレジデント(Dear Mr. President)』を発表し、その年の夏に解散した。アルマナック・シンガーズの灰の中から、ウディーは新たな短命グループ、ヘッドライン・シンガーズを立ち上げた(何について歌っていたかはご推測の程)。メンバーはハディ・“レッドベリー”・レッドベター、ソニー・テリー、ブラウニー・マギーだった。ランベルはその後作家となり、シーガーとヘイズはロニー・ギルバート、フレッド・ヘラーマンと手を組み、驚異的な成功を収めたフォークカルテット、ウィーバーズを1948年に結成した。

疑いなく、ウィーバーズは1950年代のアーバンフォークの素晴らしい復興の火付け役だった。レパートリーには、トラディショナルフォークスタンダードの忠実な解釈や、『天使のハンマー(ハンマーを持ったら)』のようなシーガーやヘイズによる心躍るオリジナル曲などがあり、巧妙に作られたレコーディング(『ツェーナ・ツェーナ・ツェーナ (Tzena,Tzena,Tzena)』、ウディー作の『So Long It's Been Good to Know You』、『オールド・スモーキー (On top of Old Smokey)』など、チャートでベストセラーを記録した)までもあった。このカルテットの商業的成功の功績は多くをプロデューサーのゴードン・ジェンキンスにもたらした。彼はウィーバー後もナット・“キング”・コール、ジュディ・ガーランド、フランク・シナトラのようなアーティストのアレンジ、指揮、プロデュースなどをして、長く偉大なキャリアを重ねた。

不運にも、ウィーバーズはそのレベルの成功を保つことが不可能だった。アメリカ史上最大の暗黒時代の一つと正面衝突したためである。共産主義者攻撃のパンフレット(レッド・チャンネルズ)が、グループに工作員、破壊分子のレッテルを貼り、ウイスコンシン州のジョセフ・マッカーシー上院議員が形成した抑圧的で魔女狩りの空気の中、ウィーバーズはブラックリスト入りとなり、あれほど彼らを温かく歓迎した自国のステージから追放された。これらの圧力の結果、グループは1953年に解散した。アメリカの社会、政治、音楽の歴史において残念な一時期であったが、20世紀アメリカの素晴らしいフォークの復興におけるこのグループの先駆者としての正当な地位を脅かすことは全くない。

フォーク急増が最も目立つ時期の一つは1950年代後期だ。1957年にサンフランシスコで結成されたザ・キングストン・トリオという、身だしなみの良い3人組の出現と符合している。デイヴ・ガード、ニック・レイノルズ、ボブ・シェーンがトラディショナルフォークソングと、親しみやすいオリジナル曲を如才なく組み合わせた作品を発表し、チャートと国に旋風を巻き起こした。フォーク純粋主義者は青ざめたが、洗練された商業的なフォークミュージックの経済的継続性は否定できないものであった。1958年11月に、トラディショナルなアパラチア地方のマーダー・バラッド『トム・ドゥーリー』のトリオのバージョンが合衆国のポップチャートのトップになり、世界中に広まった。

急成長するレコード産業にとってLPが主要な販売手段となったちょうどその時、ザ・キングストン・トリオは彼らの最初のアルバム6枚中5枚をチャートに送り続けた。ライフ誌の表紙を飾り、タイム誌で特集された。

トリオが考案したヒットメイキングのやり方は、その時代において、才能があり、売れておらず、少々日和見的なミュージシャンたちにも伝わった。ザ・キングストン・トリオの成功が、一連の、男女共様々な並びでのフォーク活動に道を開いたのだ。ソロ、デュオ、トリオ、カルテット、また、ニュー・クリスティ・ミンストレルズやオー・ゴー・ゴー・シンガーズ(一時期、のちのバッファロー・スプリングフィールドのメンバーとなるリッチー・フューレイやスティーヴン・スタイルスが



在籍していた)のように多人数のアンサンブルもあった。ペザントブラウスを身に纏ったフォークのマドンナがいたるところにいた。プロテストソングの歌い手はあらゆる方向に指を突き立てた。ワークシャツを着て、ギターを持った吟遊詩人たちはお互いにちやほやしあった。代表的なフォークシーンはボストン、シカゴ、ロサンジェルス、サンフランシスコに誕生し、賑わっていたが、このタイプのミュージックのメッカはニューヨークシティのグリニッジヴィレッジの心臓部の真ん中にあった。クラブ、コーヒーハウス、公園、はては街角にさえフォークシンガー志願者があふれていた。

人材の在庫は大変豊富であり、この流れはマネージメントや、コンサートプロモートの大立者や、レコード産業の重役室に気づかれずにはすまなかった。主要な会社はすでにフォークブームに足掛かりをつけており、エレクトラ (Elektra) やヴァンガード(Vanguard)のようなフォークを育成、提供するための独立系の新しいレーベルがそれに続いた。音楽興行主であるアルバート・グロスマン(ポール・サイモンが『簡単に散漫な演説』でパロディ化し、彼の名を永遠のものとした)も、まるで魔術師のようにフォークのスーパーグループを作り出した。コーネル大学出のシンガーソングライターをバルティモア出身の将来有望なスタンダップコメディアン兼ミュージシャンと、素晴らしい声を持ったニューヨークシティのしなやかなブロンド女性と組み合わせた。ピーター・ヤール、ノエル・“ポール”・ストゥーキー、マリー・トラヴァースは1962年のデビューアルバムのリリースの瞬間センセーションを巻き起こした。彼らの成功はグロスマンが2作目のアルバムに、クライアントの一人であるボブ・ディランを名乗る男によって書かれた曲を数曲渡した時にはさらなる高みを記録した。実際、ピーター・ポール&マリーの『風に吹かれて』のヒットバージョン、1963年のポップチャートの2位に達したその曲がミネソタ州ヒビング出身のむさ苦しいバラード歌手にドアを吹き開けてくれたのだとも言える。音楽に興味のあるほとんど誰もが彼に気づき始めていた。

そして奇妙なことだが、サイモン&ガーファンクルを組ませたのはロックンロールではなくフォークミュージックだった。音楽表現のこの弾力的な形式がまたしても音楽産業林の目立つ木となり、すでに道を別ったクィーンズの二人の若者は各々無関係にそれに惹きつけられていった。

ポールの話「50年代後半から60年代初めにかけて、音楽はたいして良くなかった。僕はロックンロールをあまり聞かなくなっていた。でもニューヨークで起きていたことの中に、とても、とても興味深いフォークシーンがあった。ブリーカー通りとマクドゥーガル通りのあたりのグリニッジヴィレッジでね。ガーズ・フォーク・シティでのフーテナニー（観客参加型のフォークコンサート）によく行ったよ。それから古いウィーバーズとウディー・ガスリーのレコードを聞き始めて、ピート・シーガーやジョン・バエズを聞いた。『ティーン向けのロックンロールはもうたくさんだ。ひどいものだったよ。フォークに行こう』と思った。それでフォークシーンをぶらついたけど、演奏する場所が見つからなかった。どうしてかっていうとフォークシンガーになりたけりゃノースダコタやテネシー出身じゃなきゃいけないくて、クィーンズはいかした出身地じゃないんだ」

アートの話「僕の視点から語れば、ザ・キングストン・トリオ（の特に）『トム・ドゥーリー』から始まったんだ。それからブラザース・フォアの『グリーンズフィールド』、ライムライターズ、そしてジョン・バエズが現れた。恐ろしいほど素晴らしいソプラノで、美しいイギリスのチャイルド・バラッドを手にしてね。それが僕を虜にした。イギリスのバラッドを聞き始めて、その種の音楽に興味を持ちだしていった。それからボブ・ディラン、彼は素晴らしいイメージと、同等のそれを書き表す能力を持っていた。そしてディランからその形式でのポールのライティング・スタイルが現れ、僕たち二人はああいう歌を歌いだしたんだ」はならなかった。

ディランの初期の作品はプロテストミュージックに分類されているが、アーティはそうは見えていない。「僕はプロテストソングは聞かなかった。ある時点で歌詞を聞くようになった。耳にしたものをね。歌詞が目覚めた。それ以前は、あのようなエネルギーや驚きを有する歌詞を聞いたことはなかった。僕にとって新しいことだった。それまで常に言葉と音楽の組み合わせだった歌が、まさに動的な意味での言葉を持ち、音楽と一緒にになった。以前は言葉はそんな力は持っていなかった」

地元での熱のこもらない反応に失望して、ポール・サイモンは劇的な一步を踏み出した。

「1963年にケネディが暗殺されてからすぐ、国を離れてヨーロッパを旅したんだ。ギターを持って、街角で歌い、パリやアムステルダムとかでそれで金を稼いだ。外で演奏すれば、朝食やディナーを食べたり、その夜泊まったりする金は十分稼げた。ヨーロッパをヒッチハイクして演奏する青二才の社会の一種だった。僕が演奏していたのはレコードで聞いたフォークミュージックだった。デヴィッド・マコウスリンドというイギリス人の若者に会ったら、彼は「イギリスに来ることがあるなら、僕の実家に来て泊まれるよ」と話した。それで僕は渡英して小さなイギリスのフォーククラブで歌い始めた。文字通りパブの真上の部屋だった。次第に僕の出演契約は増えていった。どうしてかというところイギリスでは僕がニューヨークで体験していたことと逆のことが起きていたからなんだ。1963年にイギリスでアメリカ人であることは魅惑的だった。ニューヨークでフォレストヒルズ出身であることが本当につまらないのに対してね。だから、『なあ、イギリスの方が楽しく過ごせるんだ。ここにいることにしよう』って言って、実際そうしたんだ。あちこちを行ったり来たりしていた」

ポールは商業的にもっとも成功した歌のひとつをヨーロッパ滞在中に書いた。『レッド・ラバー・ボール』という名の曲だ。サイモン&ガーファングルのライブバージョンが最終的に彼らのボックスセット、オールド・フレンズに収録されたが、ヒットしたシングルは1966年のザ・サークルというグループがレコーディングしたもので、アメリカのチャートで2位に上った。この成功への回り道への種は、少なくとも2年前にまかれた。ポールいわく、「イギリスで暮らしていた頃書いたんだ。単に金のために書いたんだよ。サイモン&ガーファングルの前の時代で、家賃を稼がなきゃいけない。ザ・シーカーズというグループにこの曲を書いたら前払い金100ポンドをもらえるって知った。オールドラリアのグループで、当時イギリスで大人気だった。そしてザ・シーカーズの一人（ブルース・ウッドリー）と共作したので、ザ・シーカーズがレコーディングするだろうと安心できた。そして無事100ポンドの前払い金を受け取った。当時はかなり大きな額で、それで完了。僕はその曲について二度と考えなかったし、彼らは歌ったんだ。その後ザ・サークルがカバーして、大ヒットレコードになった。これが唯一、自分がコマーシャルのように書いた歌だと思っている。『金を払えば曲を書くよ』ってね。大ヒットするとは期待していなかった。それで、ロックンロールのトリビアクイズのネタになるんだよ。「『レッド・ラバー・ボール』の作曲者は誰ですか？」とね。

その一方、ポール・サイモンとアート・ガーファングルの5年間仮死状態のままだったパートナーシップが1963年に息を吹き返す気配をみせた。その時、周囲に渦巻くこの新しいミュージックシーンへの共通の関心により再びつながったのだ。アートは1990年にポール・ゾロにこう話した。



僕たちが次に一緒になった時、全く違う立場に立っていた。あの年代は成長については決定的な時期だしね。僕たちはもっと前進して、大学生タイプになっていて、世界にはボブ・ディランやジョン・バエズと呼ばれるものが現れて、他にもフォークの色々が出てきたんだ。

ポールは単にこう話した。「それからボブ・ディランが現れて、本当に面白くなり始めたんだ。それで自分もそのスタイルで作曲し始めた」 『そのスタイル』とはディラネスク (Dylanesque) と確かに呼べるだろう。ポールのその種の曲に対するアートの反応—『私の兄弟』（“落ち着かない若さの無垢な声”）、『すずめ』（“この曲はこう尋ねている「誰が愛するのか？」詩的擬人化が答えのために使われている”）、『霧のブリーカー街』（後の作品では大きな注意を占めるようになるテーマ『コミュニケーションの欠如』が最初に現れたもの）—で、彼とポールがレコードビジネスでの成功に新たなチャンスを持てると考えた。彼はポール・ゾロにこう話した。

そして僕たちはハーモニーを作るようになって、それが自分たちの耳にどれほど魅力的に響くかを知った喜びで有頂天となった。なにか素晴らしいものが世に知られる前に、自分たちが知っているんだ。自分自身から何が生まれ出てくるかの目撃者なんだ。本当に無我夢中で幸せな状態だよ。歌っている間にくすくす笑いたくなくなってしまふ、このことはとっても楽しかった。

この創造的な復興時期のただなかにあって、対立状態や悪感情はわきに置かれ、再構成されたデュオは今回は堂々と自分たちの姓で自身を呼び、業界とチャートに再び返り咲くようための全面的努力を開始した。一夜にしては起きなかったが、しかし始まったのだ。

イギリスからのポールの帰郷のある回に、運命とシンクロニシティーが大々的に現れた。ポールはこう語る。「（ニューヨークで）音楽出版社でごく短期の仕事をしていたんだ。その仕事は好きじゃなかった。不満足なものだった。その会社が出版した曲を手を歩いて、他の人たちにレコーディングするよう営業するのが仕事だった。この流れで、コロムビア・レコードに歌を売りこみに行かなきゃならなかった。そこでコロムビア・レコードのプロデューサーのトム・ウィルソンと出会ったんだ。彼はボブ・ディランと、別のピルグリムスというグループのプロデュースをしていた。僕が（出版社の曲の）何曲かを見せたら、彼は「これをピルグリムスにレコーディングさせよう」と言った。僕はトムに、「僕には友達があります。一緒に歌っていて、コロムビアのオーディションを受けたいんです」と言ってみた。彼は「わかった」と言ってくれた。それで僕たち、アート・ガーファンクルと僕が入って行って、4・5曲歌った。コロムビア・レコードは僕たちと契約した。すごく驚いたよ。そして最初のレコード、『水曜の朝、午前3時』を作ったのもこの時だったんだ。

この物語について、大変重要なことをつけくわえる。アートとポールのデモセッションの担当エンジニアはコロムビアの社員、ロイ・ハリーであり、彼はサイモン及びガーファンクルの未来—集団のにも個人のにも—重要な役割を演ずることとなる。しかし『大きなチャンス』に関しての荣誉は、素晴らしいプロデューサーであり先見の明のある故トム・ウィルソンに与えねばなるまい。

トマス・ブランチャード・ウィルソンJr.は1931年3月25日にテキサス州ワコで生まれ、そこで成長した。ハーバード大学に通っている間に、彼は大学のラジオ局WHRBで働いた。彼はかつて、自身の音楽業界での成功はすべてここのおかげだとした。卒業後、レコードビジネスでのキャリアに

狙いを定め、サヴォイ、ユナイテッド・アーティスト、オーディオ・フィデリティで働き、1963年にはコロムビアでプロデューサーの職に就いていた。

当時、彼はアメリカの主要なポピュラーミュージック企業で働いていたほとんど唯一の黒人プロデューサーであったが、彼の本当に自慢となる点は彼が発掘し、共に働き、育成し、無名状態から60～70年代の伝説としたアーティストの数々だろう。そのリストにはボブ・ディラン、ブルース・プロジェクト、フランク・ザッパ、ザ・マザーズ・オブ・インベンション、ザ・ヴェルヴェット・アンダーグラウンドが含まれる。それにしても驚嘆すべき経歴である。しかしそれにサイモン&ガーファングルの成功も付け加えると、信じがたいものまでなるだろう。

アルバムのためのセッションは1964年の春に行われた。12曲目でラストの収録曲の名をとった『水曜の朝、午前3時』という完成品は、大変フォーク的だった。ボブ・ディランの1962年のデビュー作に酷似するように、そのアルバムにはトラディショナルなフォークソング（『ペギー・オー』、『山の上で告げよ』）、そのスタイルで書かれた同時代の曲のカバー（エド・マッカーディの『昨日見た夢』やボブ・ディランの『時代は変わる』）、そしてポール・サイモンのオリジナル曲が5曲、その中にアコースティックでフォーク色が強い『サウンド・オブ・サイレンス』が含まれていた。ボーカル収録が終わると、ポールはヨーロッパに向かい、旅行やソロとしての演奏をしていた。アートは残ってコロムビア大学での学究生活に戻り、アルバムの最後の仕上げを見守っていた。

トム・ウィルソンはアーティストにアルバムのライナー・ノートを書くよう依頼した。当初はポールが自作について説明するべきと考えて気乗り薄だった。しかしそのアイデアに段々好意的になり、典型的なガーファングル風熱意(Garfunkelian enthusiasm)を示した。イングランドにいるポールへの手紙に、彼はこう書き送った。

君がこれについてどう感じるか承知していますが、（君の最大の支持者である）僕は可能な限り最大に理解するために、できるだけ多くのものを欲しています。原稿を全て焼いてくれというフランツ・カフカの死に際の依頼を受け取り、それでもなお彼の最初のチャンスとして出版社に飛んでいかねばならないと感じている友人とそっくりの難しい立場に僕があることを理解してください。問題は、君が歌を理解し、僕がその価値を信じ、コロムビアがそれをレコーディングするだけでは十分とはいえないということなのです。そこで僕は昨夜、続く『これらの歌に関するリスナーズ・ガイド』を書くことを決意したのです。

彼はA面の結びのトラックに最高の賛辞を用意していた

『サウンド・オブ・サイレンス』は重要な作品です。僕たちはスケールの大きな曲を求めていましたが、この曲は期待以上でした。ポールはテーマとメロディの着想は11月に得ていましたが、曲が『突然の顕現』をするまでにはもどかしい努力の3ヶ月が必要だったのです。1964年2月19日、実際のところこの曲はそれ自身で書きあがったのです。



何年も後、ファースト・アルバムを評価してほしいと言われたアートはこう語った。「僕たちはこういうこざっぱりしたフォークグループになろうとしていたんだ。当時の自分たちをちょっと偽っていた。そこに収録した曲には、レッテル通りにしようとしているようなものもあるし、当時のマネージャーが選曲について影響を与えていたものもある。今聞いたら嫌がる部分もあるよ。『山の上で告げよ』が今話している典型的な曲だ。もし義務だと言われるようなことが実際になれば、再び演奏することはないだろうな。『太陽は燃えている』は当時の典型的な核戦争についての曲で、興味深いと思う。

『水曜の朝、午前3時』の運命とサイモン&ガーファングルの純粹フォークの日々は1964年後期には厳しい判決と直面した。ポールは簡潔にこうまとめた。

「レコードが出た。ヒットしなかった。僕はイングランドに戻ってクラブで働いた」



1964年頃のトム・ウィルソン

## 4 FORK ROCK (フォークロック)

『サウンド・オブ・サイレンス』はアーティの話通りに1964年2月19日に自動で書き上げられたのかもしれないが、アメリカにちょうど10日前に響き渡ったサウンドは沈黙とは程遠かった。1964年2月9日、日曜の夜にエド・サリバン・ショーに出演したザ・ビートルズのサウンドだった。これまでアメリカで放映されたテレビ番組屈指の高視聴率番組の一つであり、ここへの一度の出演で水門を開けられた新しい種類のミュージックは間もなく世間を席卷するのだった。しかしいわゆるブリティッシュ・インヴェイジョンは本当にオリジナルのミュージックについてのもではなかった。アメリカのロックンロールを取込み、吸収し、改革して新しくユニーク、オリジナルな形にして大西洋越しに我々に投げ返してきたものだった。

その年に頭角を現したグループザ・ビートルズ、ザ・ローリング・ストーンズ、ザ・キンクス、ヤードバーズ、デイヴ・クラーク・ファイヴなどをどれでもみれば、それが真実とわかることだろう。ザ・ビートルズ以外では、1964年に1位を取ったイギリスのグループは3つだけだった。レノン&マッカートニーの作品『愛なき世界』を歌ったピーター&ゴードン、アメリカのソングライター、ジェフ・バリーとエリー・グリニッチによる『ドウ・ウォー・デイデイ』を歌ったマンフレッド・マン、アメリカのトラディショナル曲の『朝日のあたる家』（そのアレンジはボブ・ディランのデビューアルバムのものによっていた。同様にディランは若い頃の彼の導師の一人であるデイヴ・ヴァン・ロンクのアレンジを使った）を歌ったエリック・バードン&ジ・アニマルズである。

アニマルズが電気楽器を使い、アメリカのチャートの1位に押し上げたこの曲が翌年フォークロックとして知られるものの初期の一例だった。この『朝日のあたる家』の斬新なバージョンは『水曜の朝、午前3時』のプロデューサーであるトム・ウィルソンの関心を逃れることはなかった。実際に、彼はディランのバージョンに電子楽器を使うことを試みたのだが、その企てを断念し、結果はリリースしなかったのだ。しかし頭のまわるウィルソン氏は早期にこの概念を念頭に置いていて、再び試すことをためらいはしなかった。（1年後に機会が巡ってきた）

フォークはブリティッシュ・インベイジョンの猛攻が始まった後でもアメリカのチャートで健闘し続けていた。1964年にトップ10入りしたフォークはセレンディピティ・シンガーズの『雨を降らせないで』、ゲール・ガーネットの『太陽に歌って』、イギリスのデュオ、チャド&ジェレミーの『サマー・ソング』もあった。しかし『水曜の朝、午前3時』は跡も残さず沈んでしまった。失敗にがっかりしながらも、レコードビジネスの予測不可能には慣れていたため、サイモン&ガーファンクルは肩をすくめて運命を受け入れた。ポールはイングランドに戻り、アートは大学に戻った。そして物語はまさにそこで終わってもおかしくなかった—しかしそうはならなかった。





# 私のコダクローム

## イサム



ご承知のように『コダクローム』は米イーストマン・コダック社が2009年まで製造・販売していたスライド用フィルムおよび映画用フィルムの商標のひとつです。印刷原稿用の写真を撮影するプロの写真家はもちろん、画質や色調を重視するアマチュアの愛好家にも愛されていたフィルムでした。

わが国では写真といえばプリントされたものを楽しむということが大部分でしたが、米国ではある時期までスライドプロジェクターを使って家庭で上映会を楽しむことがされていて、『エクタクローム』やこの『コダクローム』などは比較的なじみのある商標だったようです。後年にはやはり『コダカラー』などのネガフィルムで撮影して同時プリント、というのが米国でも多くなったようですが、いずれにしてもポールのようなある年代以上のアメリカ人にとっては『コダクローム』という名前はある種の郷愁を感じさせるものがあるのかな、独身時代に女の子の写真を撮っていたようなやつらには特に、などと考えます。



1973年にポールが “Kodachrome” を発表するまで、中学生だった私はこのフィルムの存在を知りませんでした。のちに私自身が写真を撮るようになってからは6×6や6×7、あるいは4inch×5inchといった中判・大判カメラには

『エクタクローム』、小型の35mmカメラでは『コダクローム』が常用のフィルムになりました。特に『コダクローム』の深い色調や粒状性は本当に魅力的で、ポールの歌が好きだからというのではなく愛用していました。1980年代当時、『エクタクローム』の現像処理はプロラボに出すと2時間ほどで仕上げてくれたのですが

『コダクローム』は現像方法が違い、受付も東洋現像所（今のイマジカ）のみで8時間から一日ほどかかりました。撮影時の露出の設定がシビアで扱いにくいフィルムですが、うまく使えばその仕上がりは見事なものでした。



雑誌『写真工業』誌の2006年8月号の特集のひとつに【コダクロームに寄せる思い】というのがありました。ハービー・山口さんなど7人の写真関係者がそれぞれこのフィルムへの思いを寄稿していましたが、そのうち3人がポールの“Mama don't take my Kodachrome away”を引用していました。その時点ではまだ製造、販売、現像処理もされてはいましたが、写真のデジタル化が進む中で皆、うすうすこのフィルムが無くなってしまいう予感があったようです。

私もこのフィルムにおおいに世話になったという思いがあり、無くなるのは本当に残念で、ディスコン間際にはせつせと『コダクローム』を入手して撮影したものでした。

もうすでに現像を引き受けるラボもなくなりあらたに撮影することはできないのですが、撮影した多くのスライドは私の手元にあります。” Brought them all together for one night” は可能なわけです。







# 『水曜の朝、午前3時』物語

偉大なプロデューサー、  
故トム・ウィルソン氏への賛辞

## イッシー&バツシー

はじめに。

もし最初に聞いた『サウンド・オブ・サイレンス』が、大ヒットしたエレキ版ではなく、このアルバムのバージョンだったとしたら、中学1年生のぼくはS&Gファンになっていなかったかもしれない。

この『水曜の朝、午前3時』がなかりせば、それ以降のS&Gもない。このアルバムには、何があって、何がないのか。

この小論では、1963年から翌64年までを時系列にたどりながら、当時の関係者の気持ちを推測し、仮説もまじえて真相に迫ってみたい。

### I. 売り込みによるチャンス

1963年夏、コロムビア・レコードのオーディションに合格した時点から「サイモン&ガーファンクル」のキャリアは始まった。翌64年3月にアルバム曲がレコーディングされ、その半年後の同年10月に発売された。オーディションから1年以上経っていた。

63年夏、ポール・サイモンは音楽出版社のセールスマンとして、コロムビア・レコード・プロデューサーのトム・ウィルソンに会った。そのセールスは、厚かましく押しが強かったと思われる。結局ポールは自作の『私の兄弟』の売り込みに成功している。さらに（ちゃっかりと）相棒とのデュオも売り込み、オーディションも受けるチャンスを得た。

当時のポール・サイモンは、ロックンロールからフォーク・ミュージックに転向したばかりの、にわかフォーク・シンガーだった（1961年までは明らかに50'sロックンロール・スタイルだった）。『私の兄弟』は出来たての新曲だった。

旧「トム&ジェリー」もまた、大急ぎでリフォーム中で、新生フォーク・デュオへと模様替えの真っ最中だった。エバリー・ブラザーズのコピーで鍛えたロックンロール・ハーモニーを活かして、多くのフォークソングを自分たちのレパートリーとしていった。

オーディションには合格したものの、いかんせん、オリジナル曲が足りない。『カルロス・ドミンゲス』と『私の兄弟』の2曲しかない。この2曲のカプリングでシングル盤デビューということも検討されたことと思う（後日英国コロムビアがポールのソロで実現させた）が、おそらくトム・ウィルソンは「インパクトがない」と判断したのだろう。もっとオリジナルを増やそうという結論と

なったようだ。

ポールは秋に、『すずめ』『霧のブリーカー街』と書き進めたが、まだ強力な目玉作品を欠いていた。



## II. サウンド・オブ・サイレンス

この年11月22日、J.F.ケネディ大統領が暗殺された。

この事件が、ポールの創作活動にどんな影響したかは、何も証明できない。しかし事件と相前後して、『サウンド・オブ・サイレンス』を書き始めている。この新曲がポールにとって最大の分岐点になるだろうという予感、本人にもあったことだろう。

アーティのライナーノーツによると、ポールが同曲を完成させたのは翌64年2月19日だった。仕上げに3か月を要したのである。

出来映えは素晴しかった。

この曲の完成を以て、トム・ウィルソンはアルバム制作を決断したのだろう。トムはオリジナルをもう1曲要求して（『水曜の朝～』となる）結局5曲、カバー7曲を加えてアルバムとする。スタジオ日程が3月10日開始と決まったところから推測しても、『SOS』のインパクトは大きかったと思われる。

トム・ウィルソンは、この無名の新人デュオの作風が少々地味だと、感じていたフシがある。よって、カバー曲は極力明るい曲が選ばれた。『ユー・キャン・テル・ザ・ワールド』『山の上で告げよ』『ペギー・オー』『きのう見た夢（平和の誓い）』といった、いずれもにぎやかで晴れやかな作品群である。

しかしトムは、さらにもうひとつ、大きな目玉商品が必要だったと考えていた。





### III. 時代は変わる

トム・ウィルソンは、S&Gにある提案を出したのではなかろうか。それは、S&Gがボブ・ディランの新曲『時代は変わる』をカバーするということである。

ボブ・ディランは1963年10月に、トム・ウィルソンのプロデュースのもとで『時代は変わる』をレコーディングしていた。本人もトムも大ヒットの予感があったのだろう。共通のプロデューサーであるトムは、S&Gにこの曲のカバーを提案した。プロデューサーの真意としては、ディラン人気にあやかって新人を売り出そうとしたのである。

ポールが、この露骨な商業路線に唯々諾々と従ったとは思えない。自身がフォーク転換を果たすのに大きな影響を受けたボブ・ディランだけに、そのカバーをしるというのは、彼のプライドが、そう簡単には許さなかった。

しかしやはり、実績のない新人アーティストは、プロデューサーの意向には逆らえなかった。何と言っても、ポールは若くして音楽ビジネスを知り抜いていた。S&Gは『時代は変わる』を受け入れた。

レコーディングは着々と進んだ。

3月10日、初日。『霧のブリーカー街』『SOS』『時代は変わる』の3曲収録。いずれもこのアルバムの柱である。

3月17日、二日目。『私の兄弟』『水曜の朝～』『太陽は燃えている』『きのう見た夢～』の4曲。カバーである『太陽は～』は重要である。この曲は冷戦当時、現実の恐怖であった核戦争を描いている。S&G、特にアーティの歌唱には強い思い入れが感じられる。

3月31日、最終日。『すずめ』『ベネディクタス』『ペギー・オー』『ユー・キャン～』『山の上～』の5曲。これで全曲完了した。



## IV. アルバムタイトルの謎

レコーディングは終わったが、すぐにはリリースされない。


7月1日付けのアーティによるライナーノーツによれば、ハーモニカの「マスタリング」をすることを言っている。

【従来、ハーモニカを「練習」すると日本語訳された部分だが、スタジオ技術の「マスタリング」が正しいと思われる。また『水曜の朝〜』が64年4月に「書き直された」と訳されていたが、この曲は3月17日にレコーディングされている。原文は「WM3AM is a change of pace.」であるところからして、翻訳の間違いではないか。「『水曜の朝〜』は、それまでの深刻なものから軽いものへと方針転換」と解すべきではないか。】

そもそもトム・ウィルソンが、ライナーノーツの執筆をアーティに頼んだのも、低予算のためだろう。アーティなら原稿料を必要としない。

またグループ名が「サイモン&ガーファンクル」に決定するまでにも、ひと悶着あったそうだ。最大の謎は、アルバムタイトルだ。


なぜ『水曜の朝、午前3時』となったのだろうか。前述のとおり、最も重要な曲が『SOS』だということは、関係者一同、理解を共有していたはずだ。ならばアルバム『サウンド・オブ・サイレンス』とするのが道理だ。しかしなぜか『水曜の朝』がタイトルとなった。当事者が生存中に、ぜひ確かめたい一事である。


Stereo—SICP 1481

---

PRODUCED BY  
TOM WILSON

Mono—CL 2249



# WEDNESDAY MORNING, 3AM

exciting new sounds in the folk tradition by

# SIMON & GARFUNKEL

YOU CAN TELL THE WORLD  
LAST NIGHT I HAD THE STRANGEST  
DREAM  
BLEECKER STREET  
SPARROW  
BENEDICTUS  
THE SOUNDS OF SILENCE

HE WAS MY BROTHER  
PEGGY-O  
GO TELL IT ON THE MOUNTAIN  
THE SUN IS BURNING  
THE TIMES THEY ARE A-CHANGIN'  
WEDNESDAY MORNING, 3 A.M.

---

Dear Paul, July 1, New York

How's London? I just want to interrupt your tea for a moment to let you know what's been happening since you left. You know it kills me that you're in London now, goofing, while I'm here with three term papers ahead of me. And the album's sitting waiting downtown at Columbia in our cubby.

Two things before I forget: Did you find a scooter for us? Call up that number I gave you, the guy knows all about these sort of things—he'll be very helpful. I expect to see you and the machine in Paris when I come after finals. Also send me the chords to "Wednesday Morning" because I expect to do singles at Gerde's for a few nights.

Tom asked me yesterday if I would write the album notes. I told him I thought the author should explain his own songs, but I'm reconsidering. In fact, it's a very pleasant task. I know how you feel about this, but I (your greatest advocate) want as many as possible to understand as much as possible. Please understand that mine is the difficult position more than slightly analogous to the man who received Franz Kafka's dying request to burn all his manuscripts, but who nonetheless felt obliged to rush off to the publisher at his first chance. The point is that you understanding the songs, me believing in their worth, and Columbia recording them, is really not sufficient. So I decided last night to write the following as a "listener's guide" to the songs:

\* \* \*

I first heard **He Was My Brother** in June 1963, the week after Paul Simon wrote it. Cast in the Bob Dylan mold of that time, there was no subtlety in the song, no sophistication in the lyric; rather, the innocent voice of an uncomfortable youth. The ending is joyously optimistic. I was happy to feel the way the song made me feel. It was clearly the product of considerable talent.

In September 1963, I returned from Berkeley, California, where I had spent the summer. Paul had just completed **Sparrow** and was already working on the third song. With **Sparrow** begins much of the style that characterizes all the later work. The clarity of the song's structure is matched by the simplicity of its subject. The song is asking: "Who will love?" Poetic personification is used for the answers: Greed ("the oak tree"), Vanity ("the swan"), Hypocrisy ("the wheat").

I was greatly impressed with **Sparrow**, and I arranged the two songs for us. We sang at Folk City that night and formed the partnership.

I confess that **Bleecker Street** (finished in October 1963), was too much for me at first. The song is highly intellectual, the symbolism extremely challenging. The opening line in which the fog comes like a "shroud" over the city introduces

the theme of "creative sterility." But it is the second verse which I find particularly significant:

*Voices leaking from a sad cafe,  
Smiling faces try to understand;  
I saw a shadow touch a shadow's hand  
On Bleecker Street.*

The first line is a purely poetic image. The second line touches poignantly on human conditions of our time. To me, it shows the same perceptive psychological characterization as **Sparrow**—the "golden wheat" ("I would if I could but I cannot, I know"). The third line marks the first appearance of a theme that is to occupy great attention in later work—"lack of communication."

The author says that the poets have "sold out" ("the poet writes his crooked rhyme"). The line "Thirty dollars pays your rent" reminds one of Judas Iscariot's betrayal of Christ for thirty pieces of silver. Admittedly, the song is difficult to understand, but worth the effort.

**The Sounds of Silence** is a major work. We were looking for a song on a larger scale, but this was more than either of us expected. Paul had the theme and the melody set in November, but three months of frustrating attempts were necessary before the song "burst forth." On February 19, 1964, the song practically wrote itself.

Its theme is man's inability to communicate with man. The author sees the extent of communication as it is on only its most superficial and "commercial" level (of which the "neon sign" is representative). There is no serious understanding because there is no serious communication—"people talking without speaking—hearing without listening." No one dares take the risk of reaching out ("take my arms that I might reach you") to disturb the sound of silence. The poet's attempts are equally futile ("... but my words like silent raindrops fell within the wells of silence"). The ending is an enigma. I find my own meaning in it, but like most good works, it is best interpreted by each person individually. The words tell us that when meaningful communication fails, the only sound is silence.

**Wednesday Morning, 3 A.M.**, written in April 1964, is a change of pace. The heightened intensity of **The Sounds of Silence** has given way here to a gentle mood, and the melody is once again a soft, smooth vehicle. It is a painting that sets a scene, sketches some details and quietly concludes.

\* \* \*

Paul—let me know what you think. I tried to be as honest as I can. You know how [I] [we] feel—there may or may not be a market for intellectuality, but there is your personal feel for the material, and ours for the performance.

I promised I'd be down to the mastering next week to fight for the harmonica in "He Was My Brother." (Making an album is lots of fun.)

Listen, try and get us a job for when I come. And no singing in the streets.

*Art Garfunkel*

5



## V. 不発の功績

謎を含みながら秋となり、1964年10月、ついにアルバム『水曜の朝、午前3時』はリリースされた。

結果は不発だった。それも並大抵ではなく、フォーク・シーンから無視されたような大失敗だった。原因は、ブームがすでに退潮気味となっていたことと言われる。リスナーは、『水曜の朝』のようなフォークソングに飽きてきていた頃だった。コロムビアも、ほとんどセールスプロモーションを行わなかったようだ。

またこの年、ビートルズが米国進出に成功していたことも、“時代が変わる”理由となったことは間違いない。

もし、このアルバムが大失敗せずに、そこそこ売れていたら、その後のS&Gはどうなっていただろう。

きっと、フォーク・ロック版『SOS』のムーヴメントは起こらなかったことだろう。すなわち、ぼくたちが知っているS&Gは存在せず、ニューヨークのローカル・フォーク・デュオとして、マニアに知られる存在で終わっただろう。二人とも早々に現役は引退し、ポールは音楽業界人、アーティは大学院へと戻っただろう。

このときのS&Gは、小さく押し畳まれたバネだった。何かをきっかけに、大きく反発する直前だった。そして次の大ブレイクを作ったのも、この失敗作を制作したトム・ウィルソンだった。

**ビッグバンはブラックホールからしか生まれない。  
次の時代を作るのは、一度失敗した若者たちだ。**

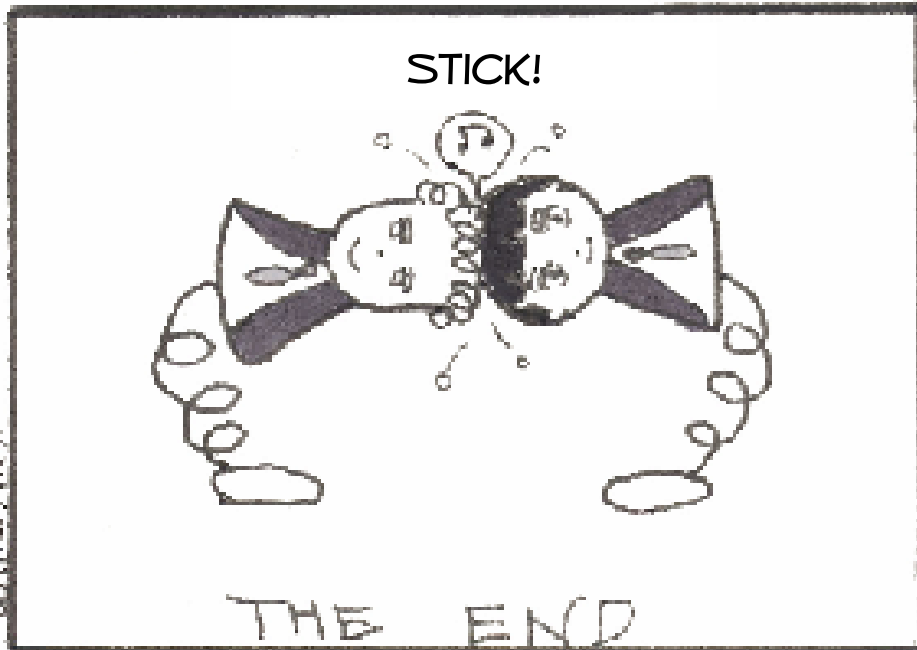
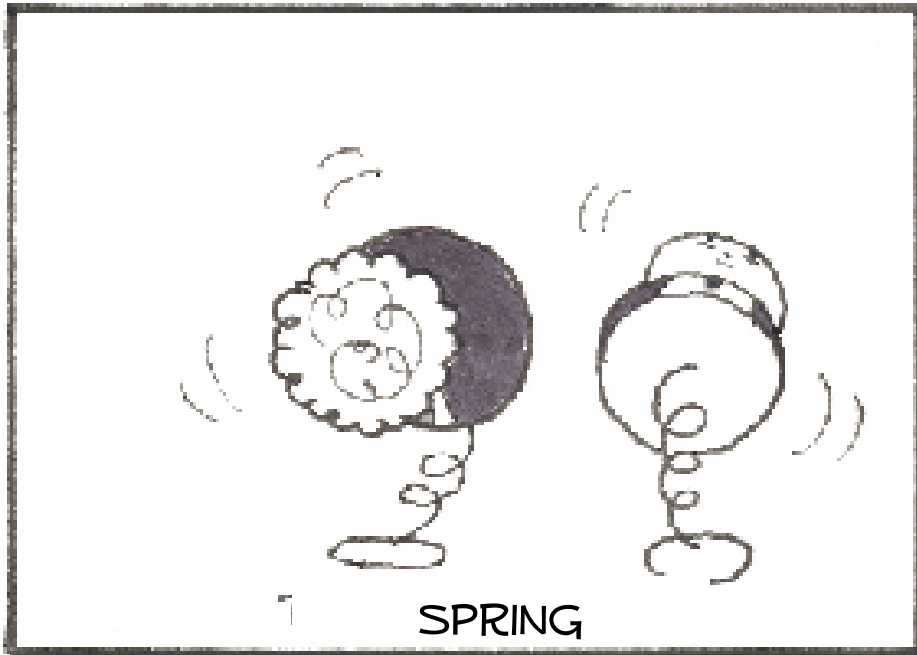
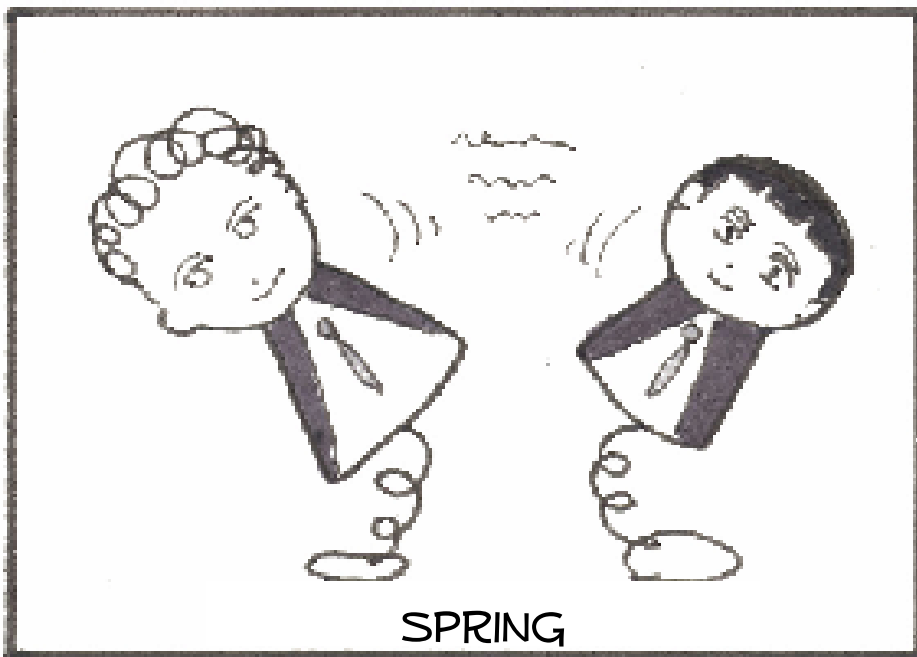
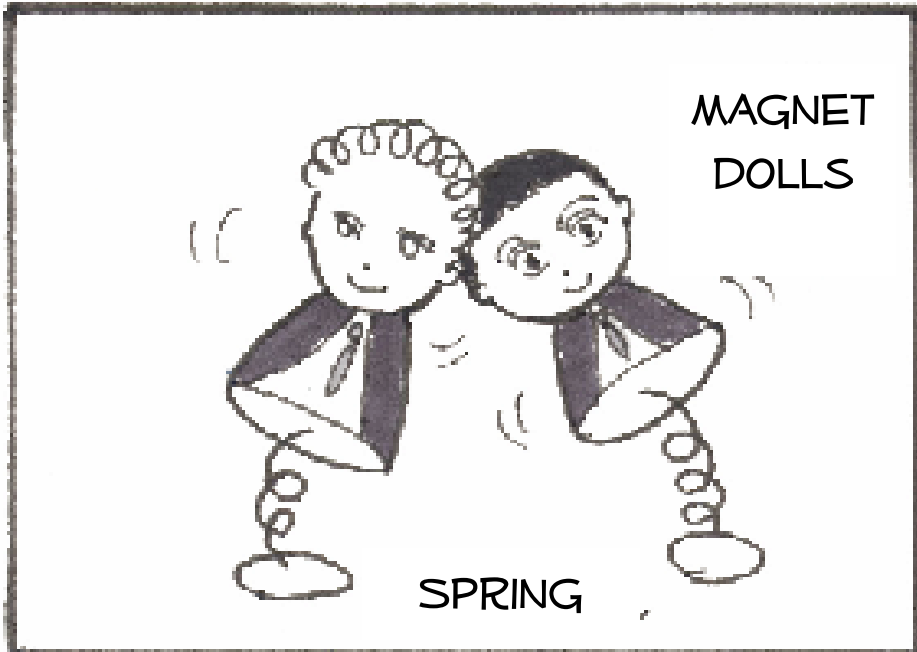
追伸：『ベネディクタス』には、チェロまたはダブルベースのボウイング（弓弾き）が入っている。おそらくベーシストが兼任したとおもわれるが、なかなかの名演である。



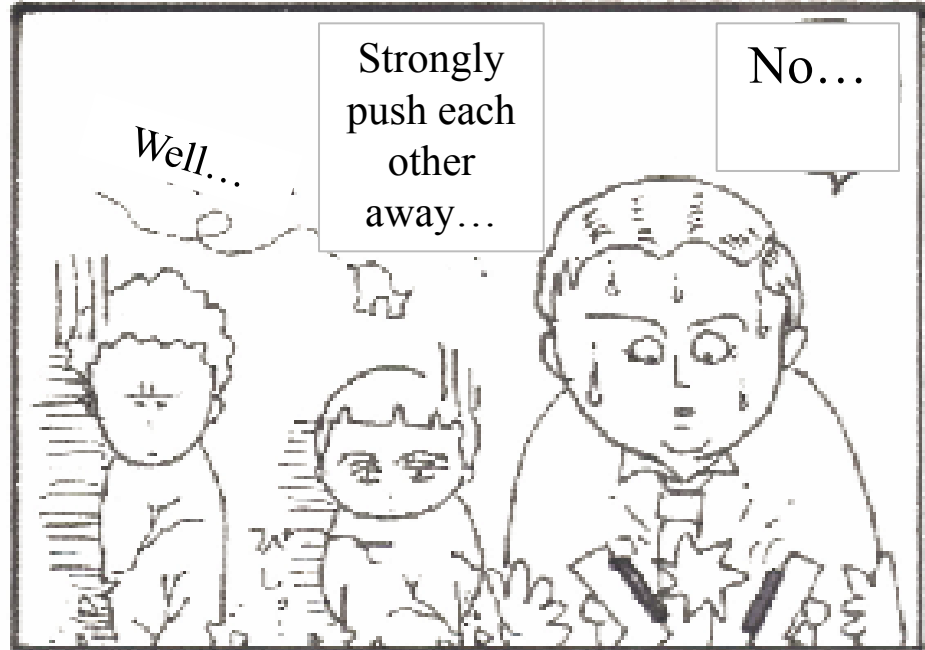
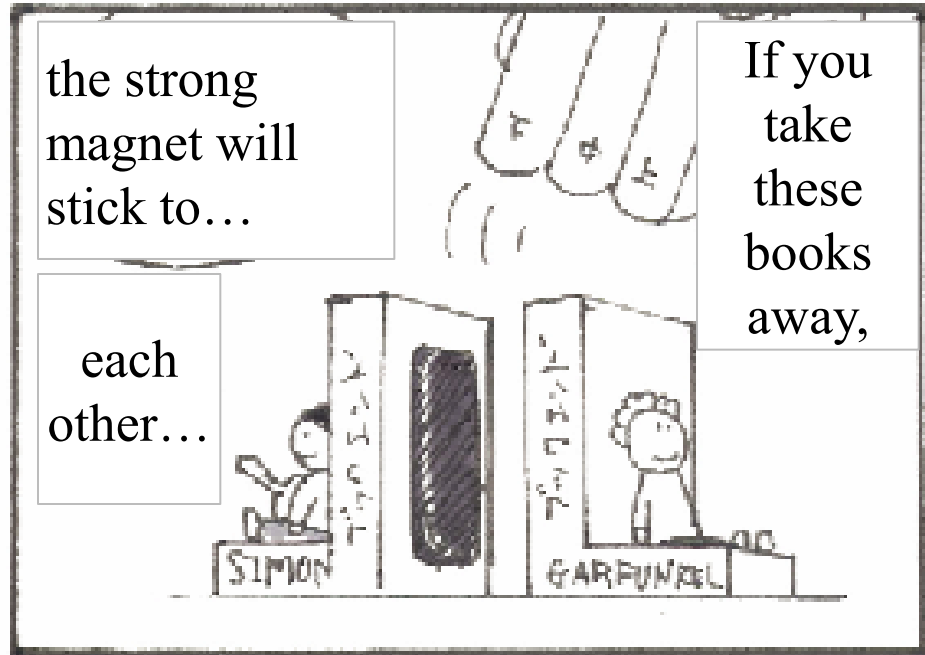
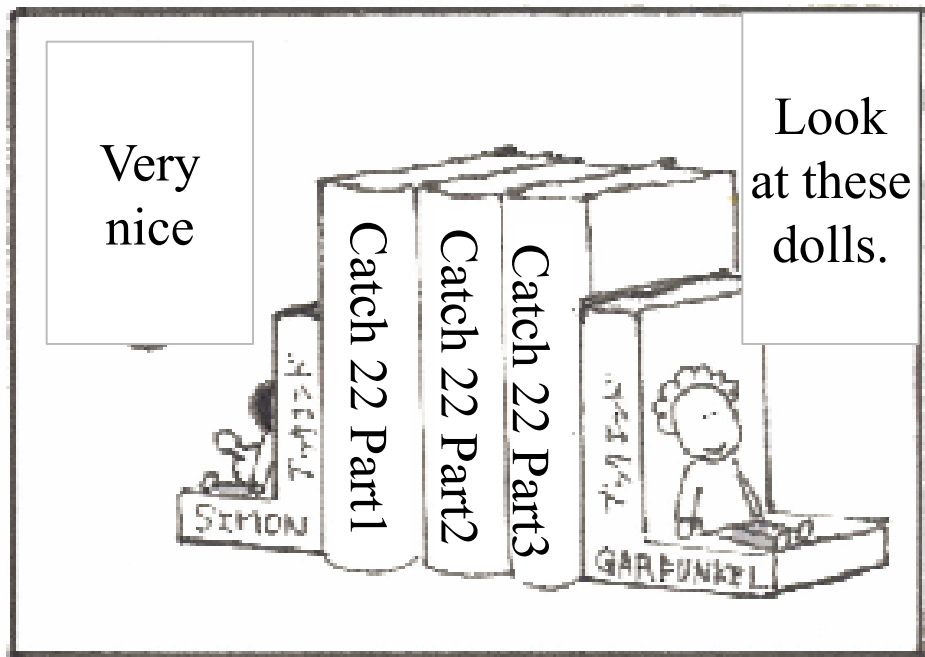
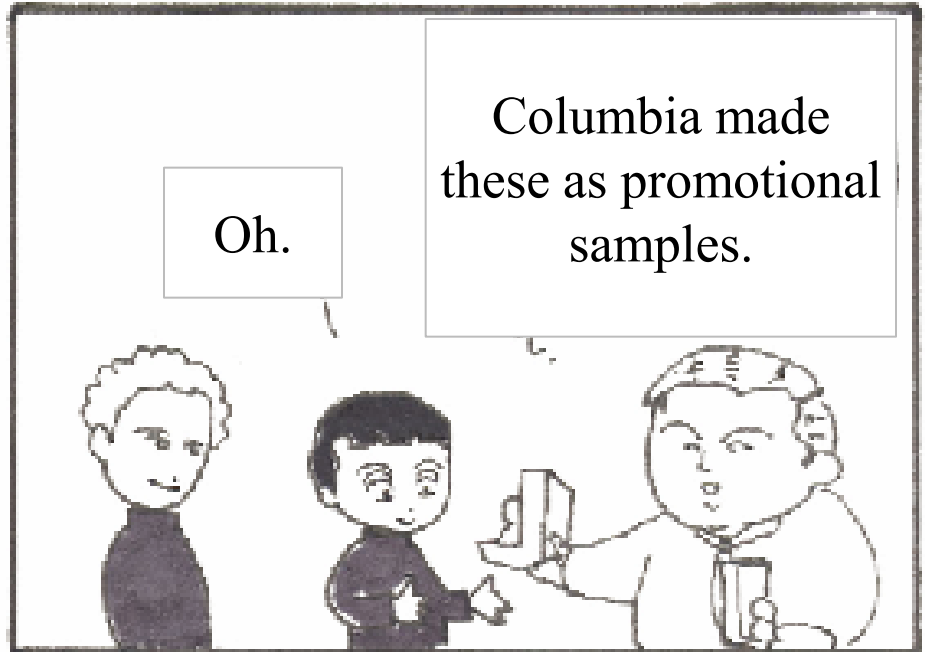




WE FIGHT, WE CONNECT



BOOKENDS



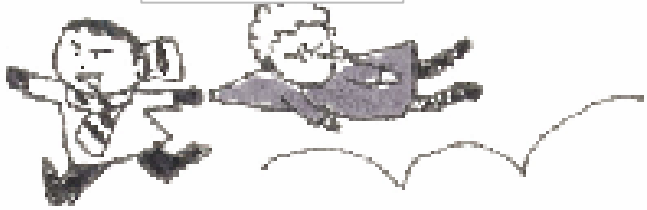
© 2001 Columbia Pictures Industries, Inc.



PROMOTIONAL VIDEO, PART 2

Let's go

Why are you so grumpy?

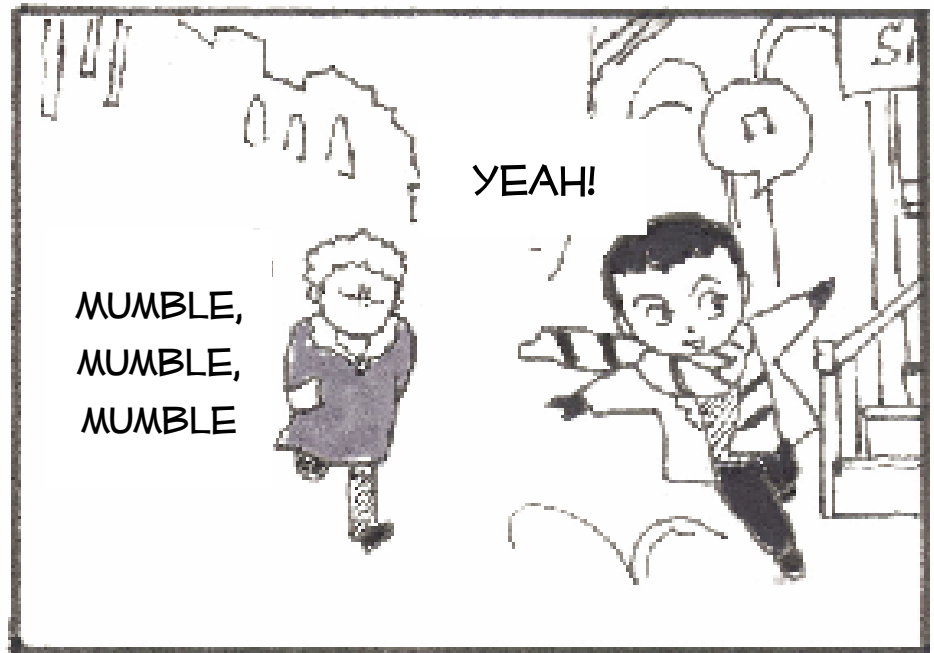
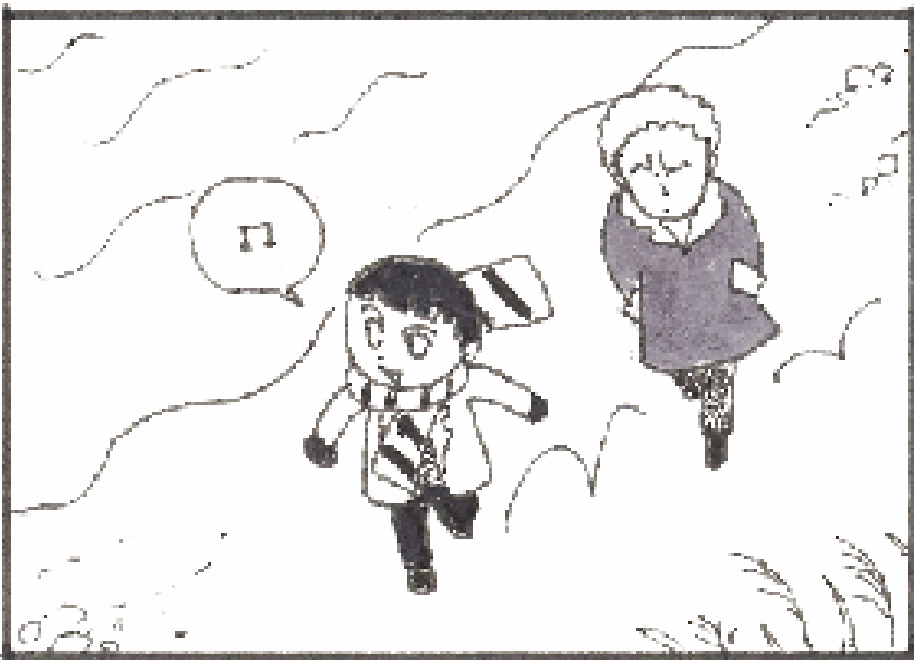


PROMOTIONAL VIDEO, PART 1

Don't complain, we'll just do it

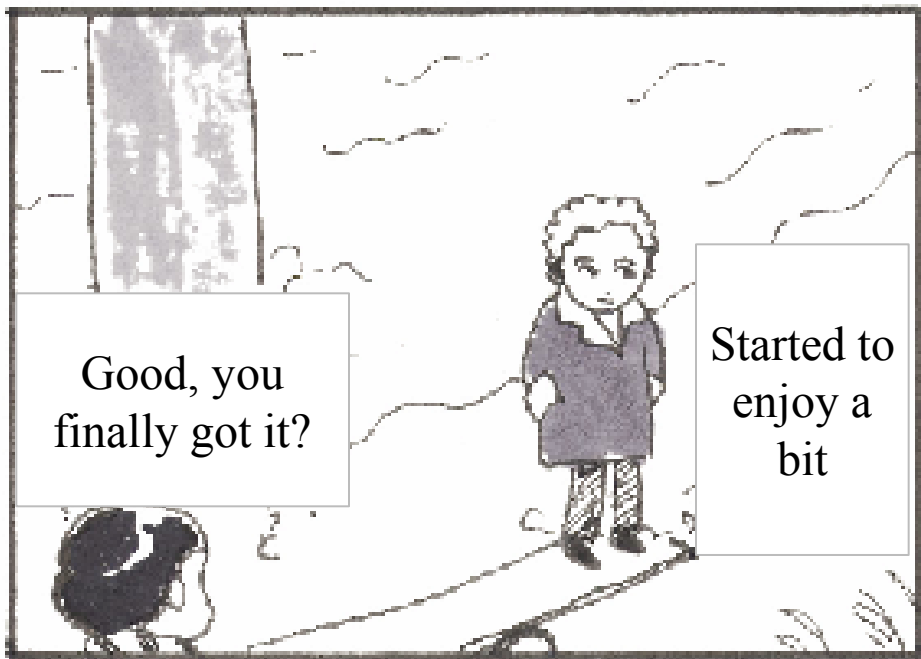
What?

The two run through the town happily



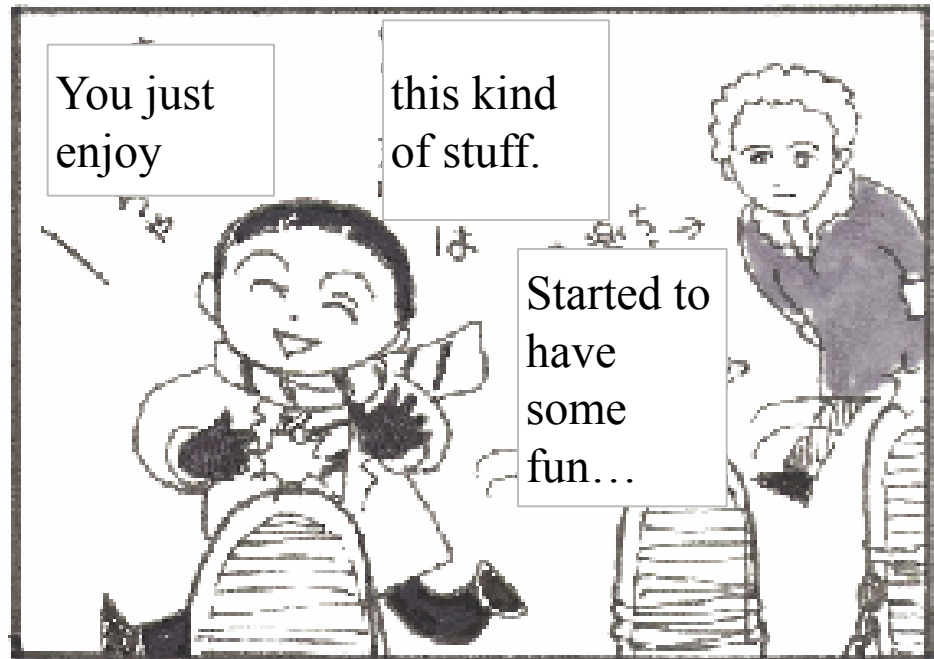
YEAH!

MUMBLE, MUMBLE, MUMBLE



Good, you finally got it?

Started to enjoy a bit



You just enjoy

this kind of stuff.

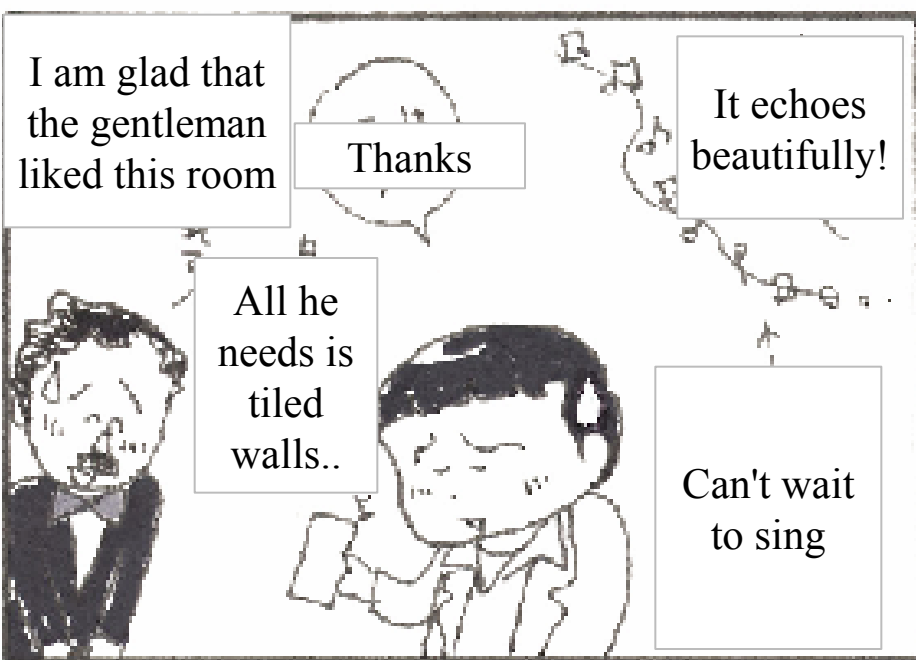
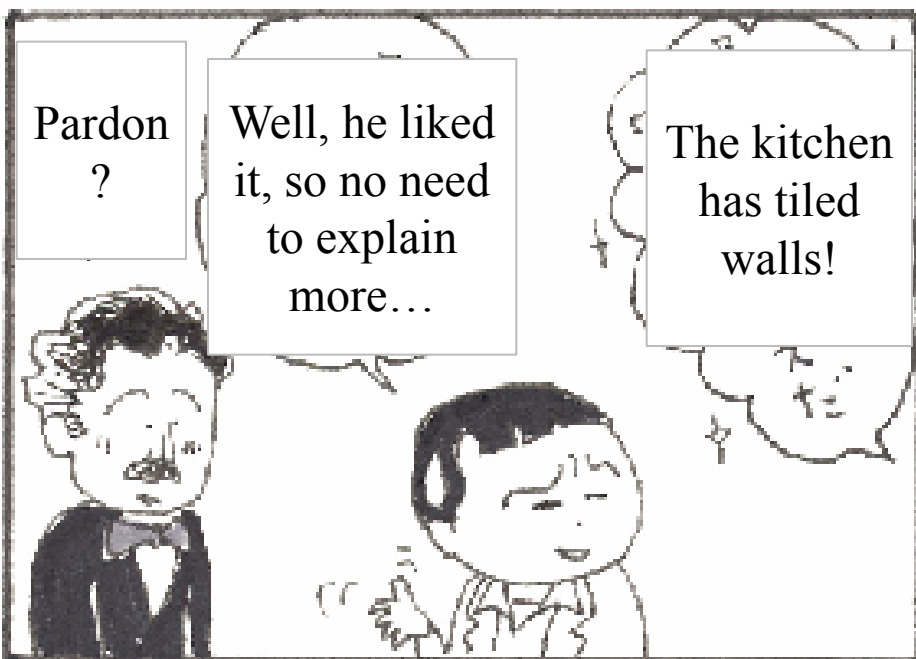
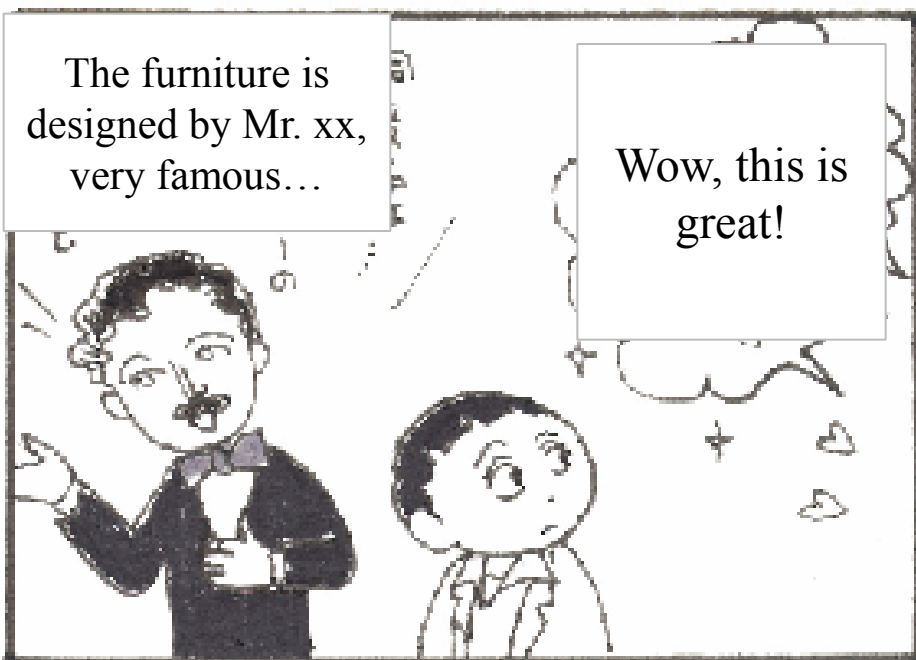
Started to have some fun...



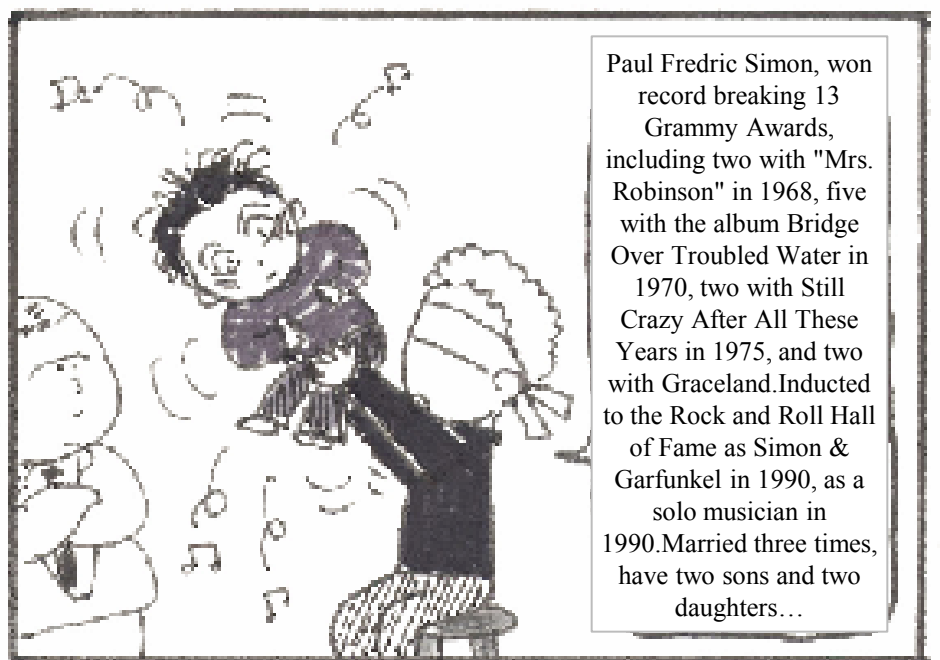
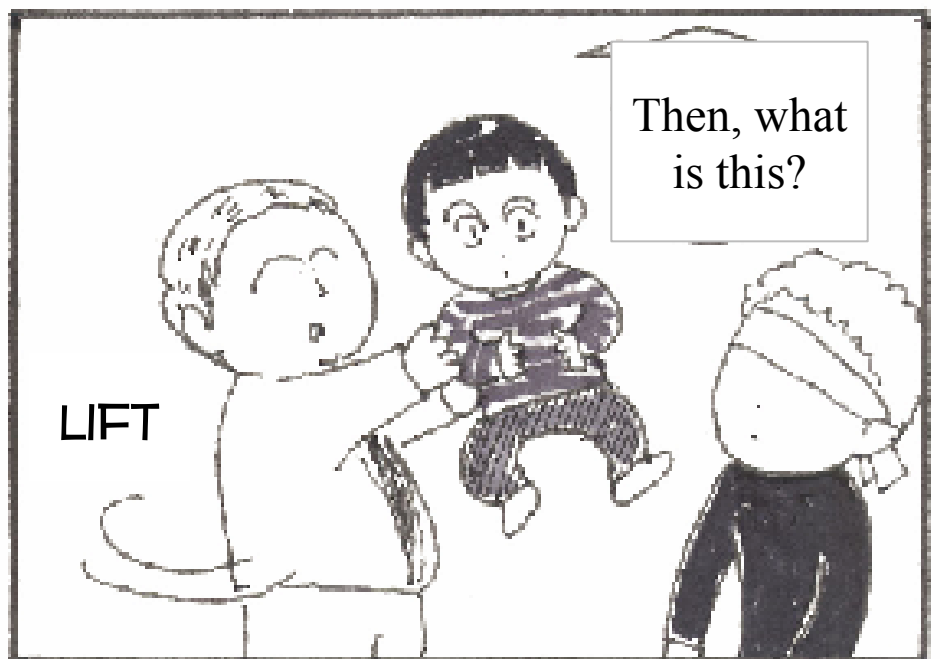
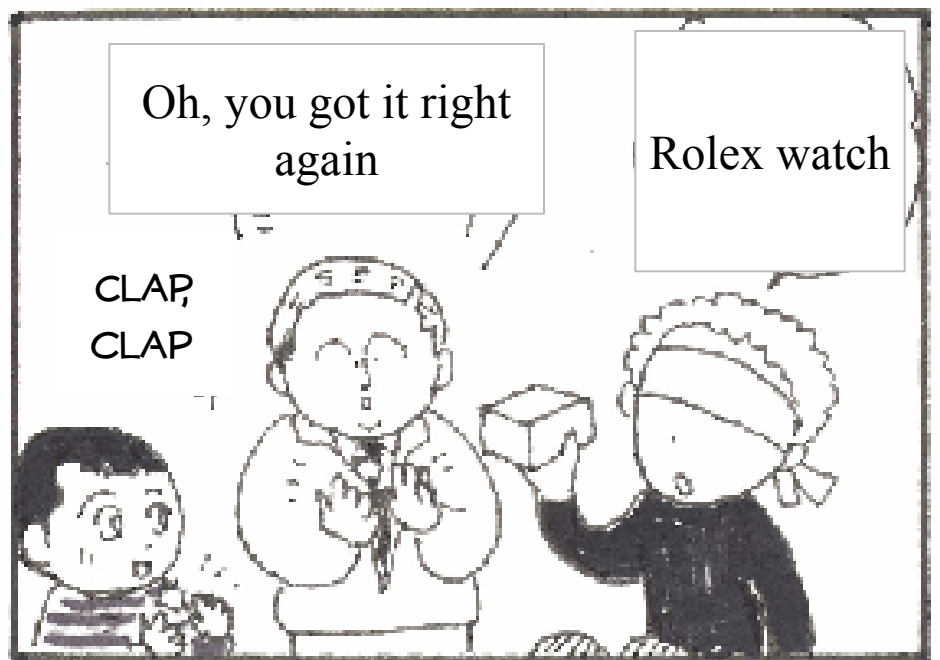
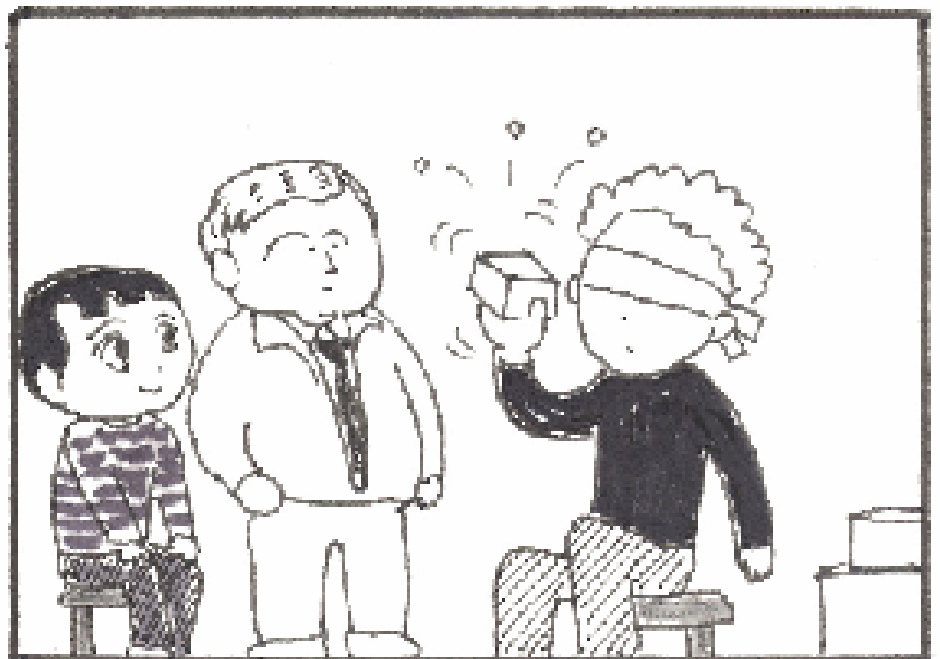
Artie, you've gone too far!



**SUITE ROOM AT SUPER NICE HOTEL**



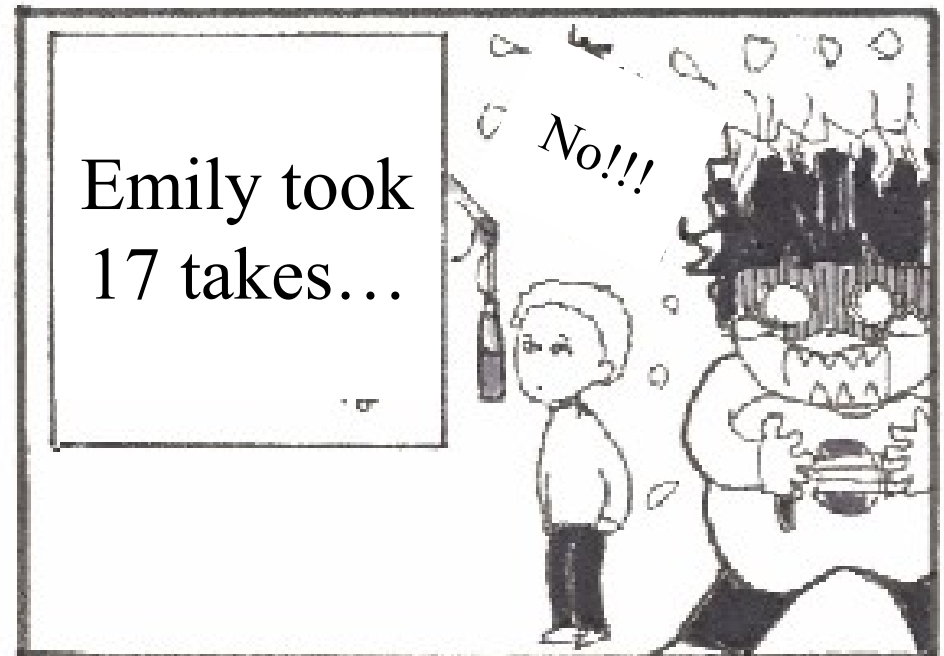
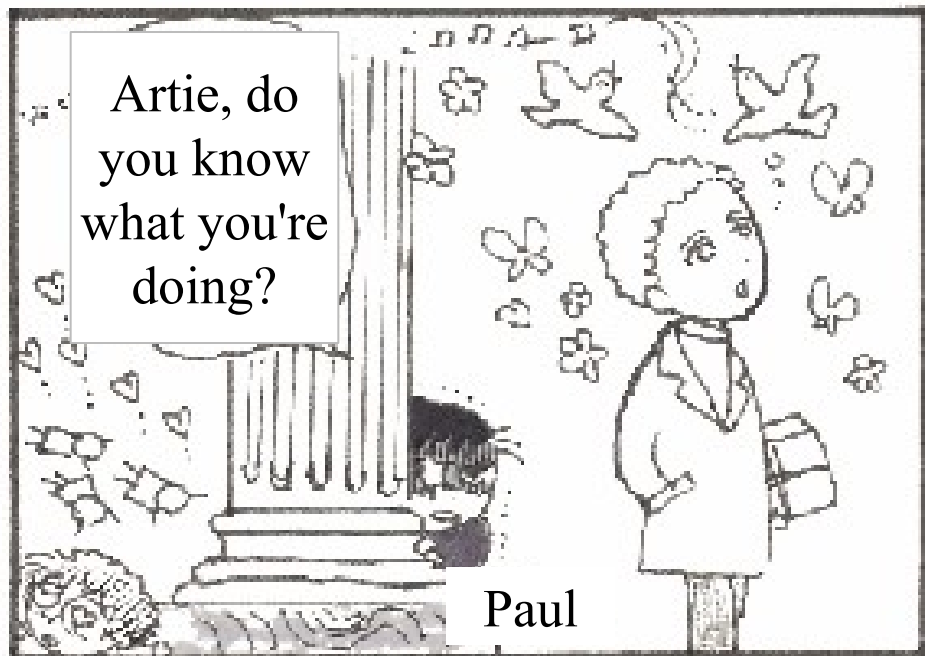
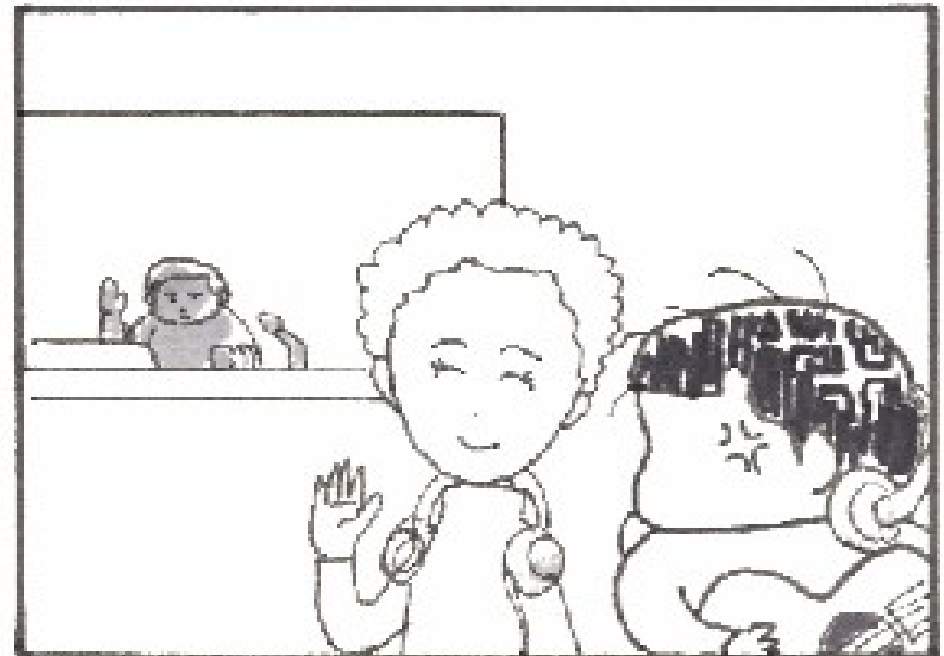
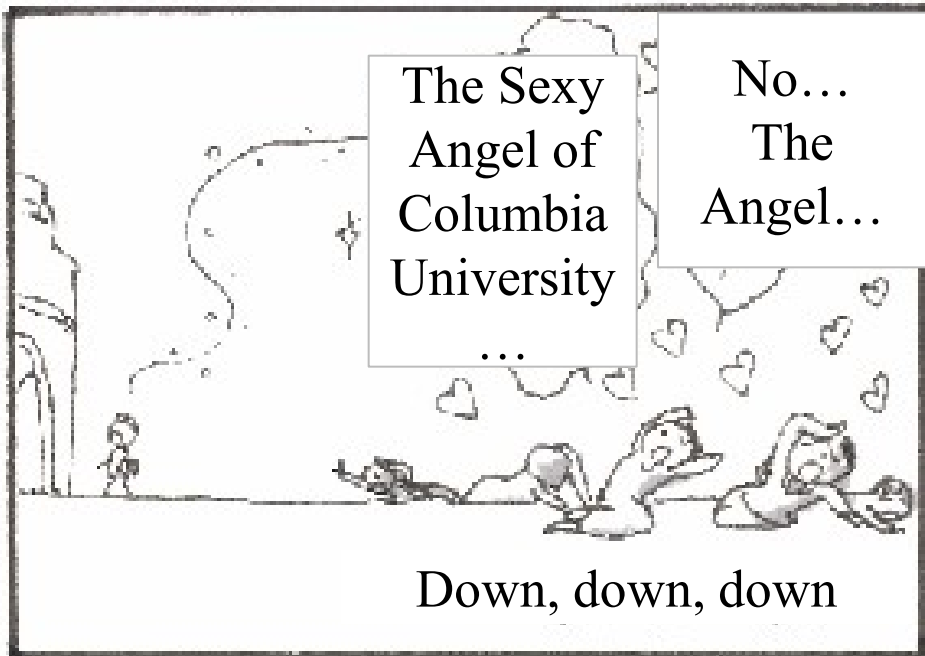
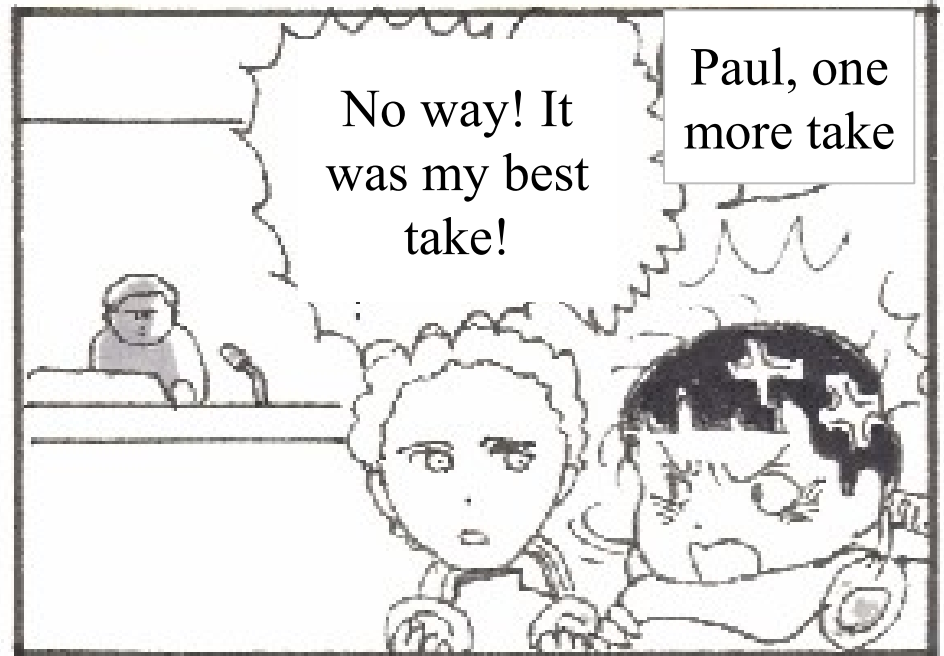
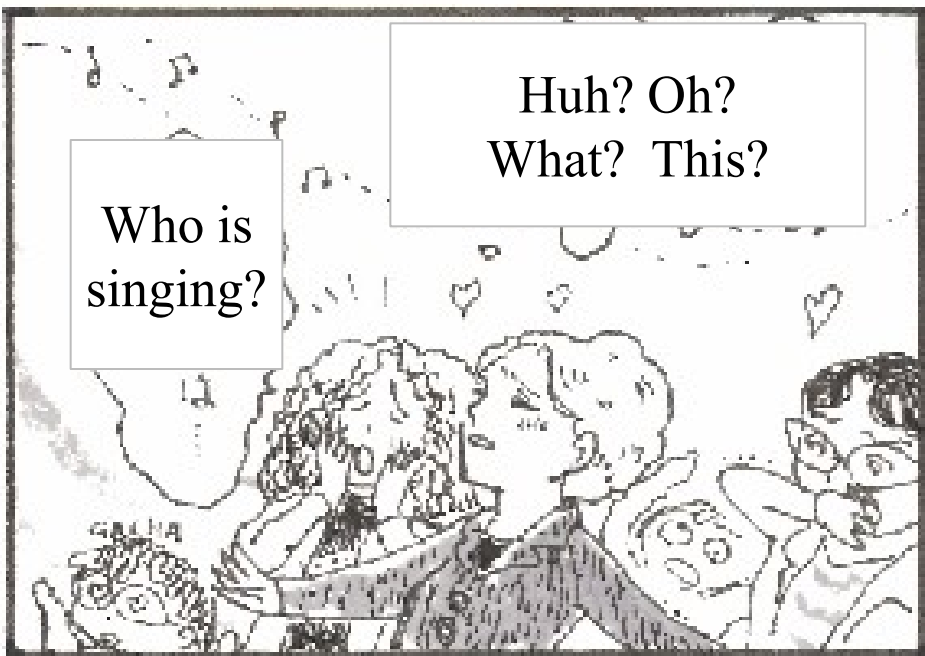
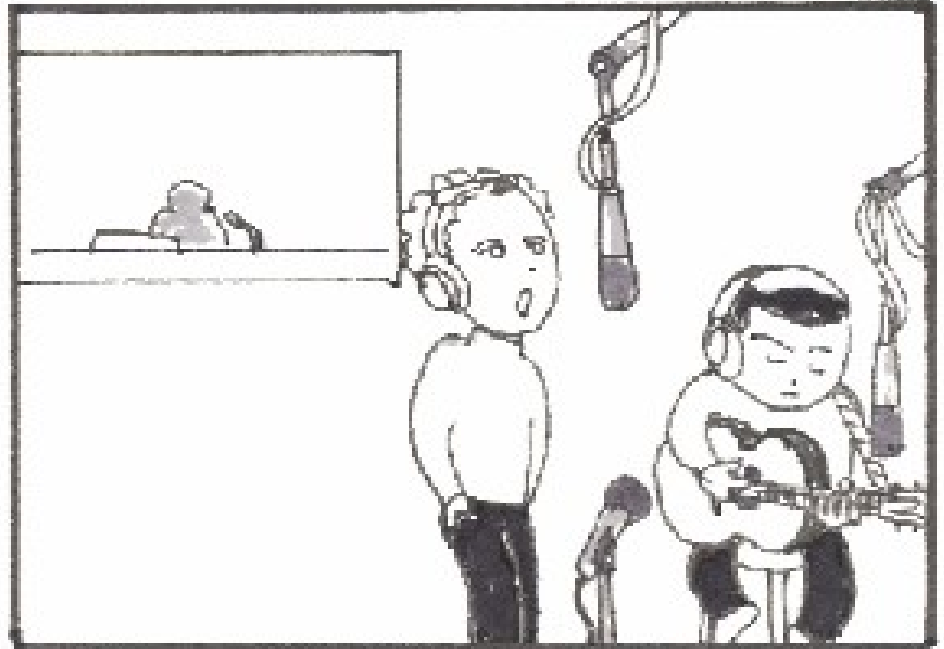
**LISTEN AND TELL**



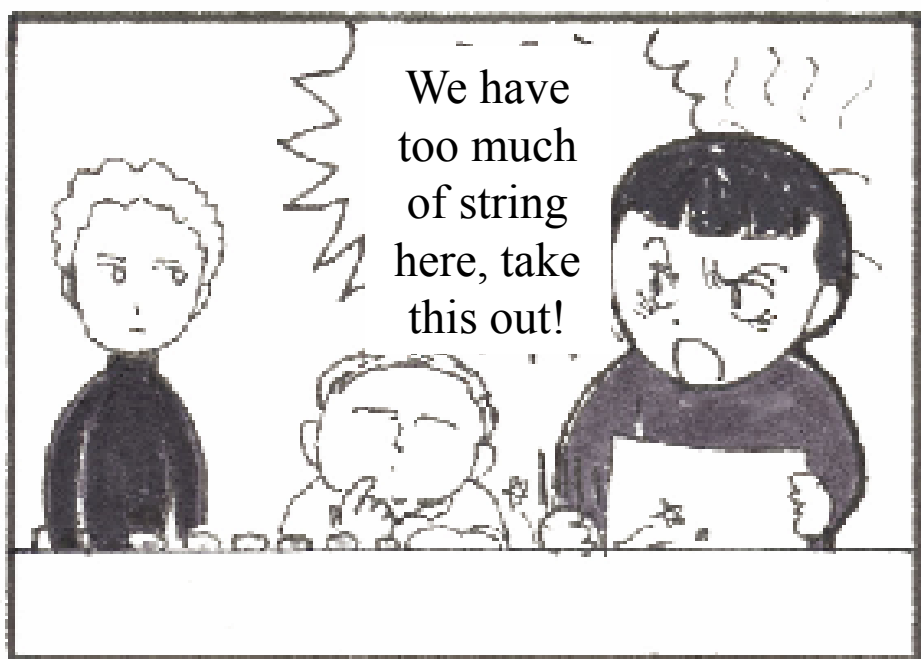
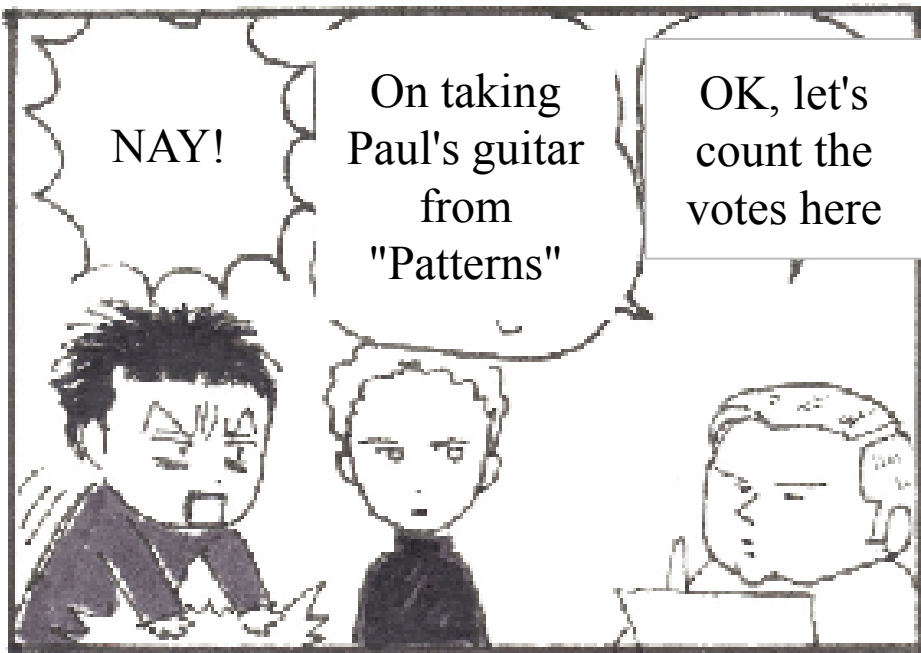


SEXY ANGEL: THE ANGELIC VOICE

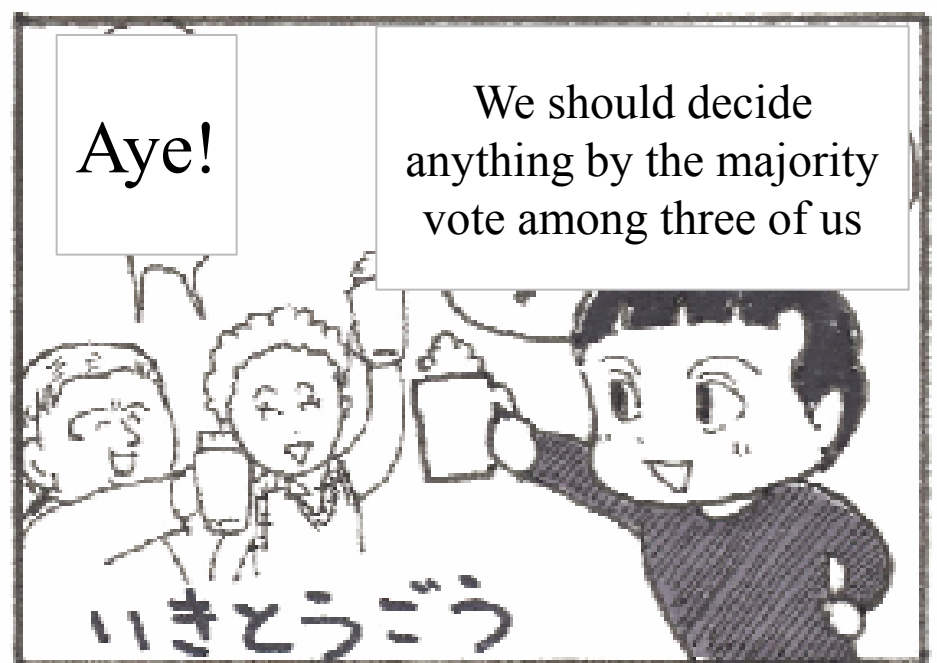
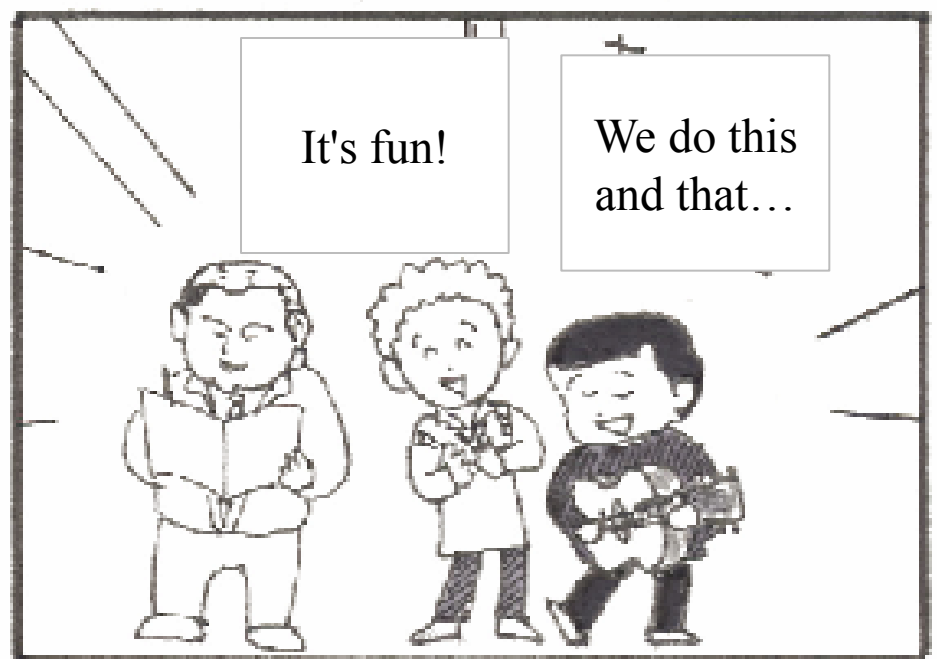
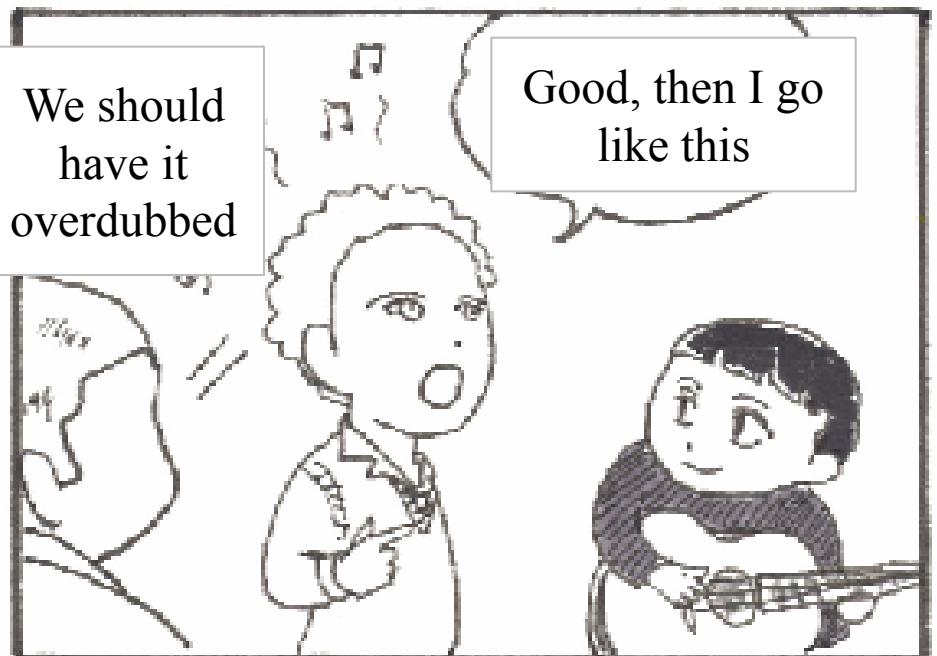
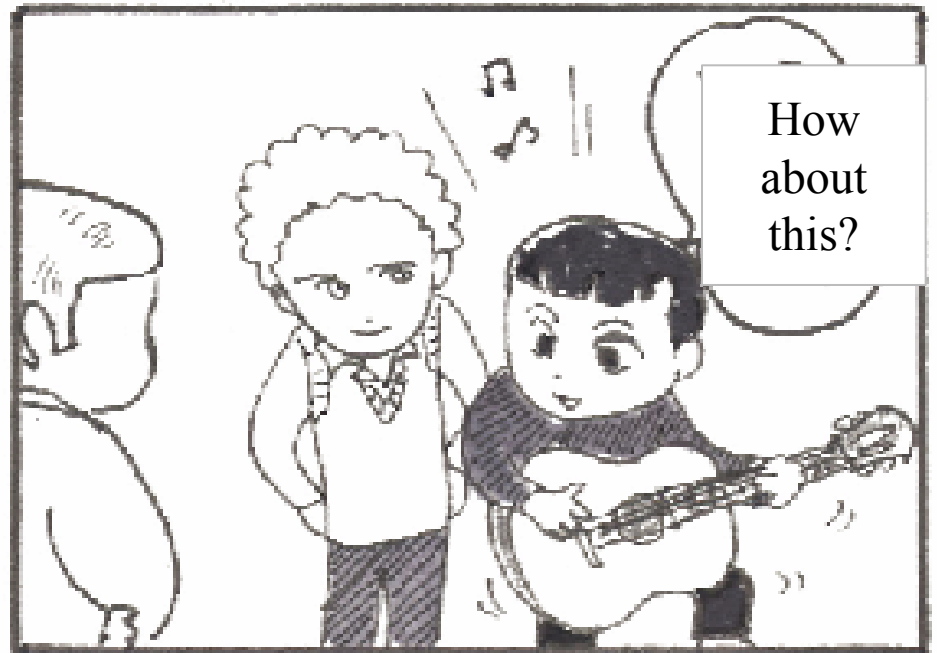
FOR EMILY, WHENEVER I MAY FIND HER



MAJORITY RULE, PART 2

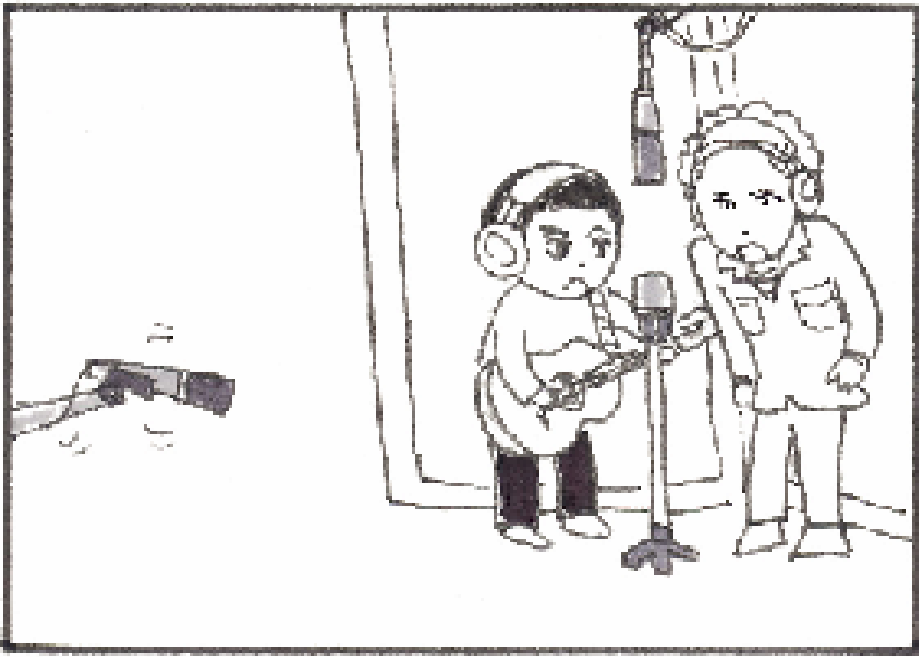


MAJORITY RULE, PART 1





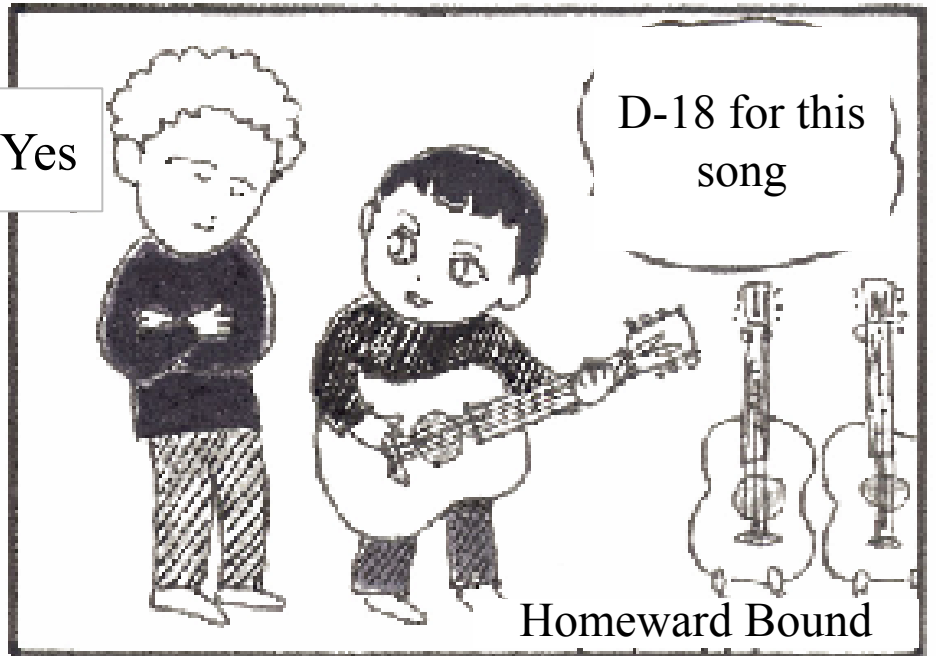
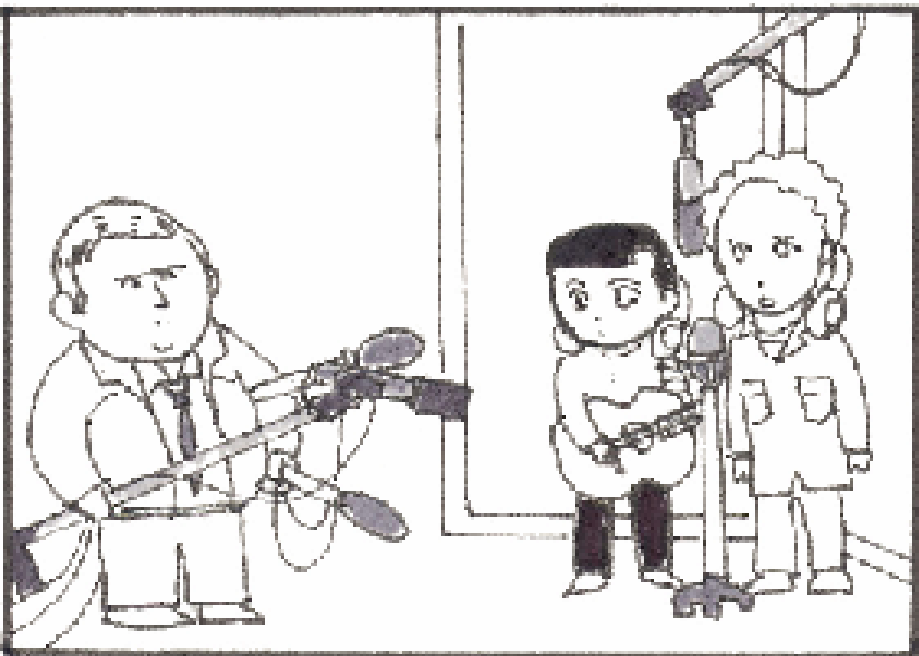
# RECORDING STUDIO



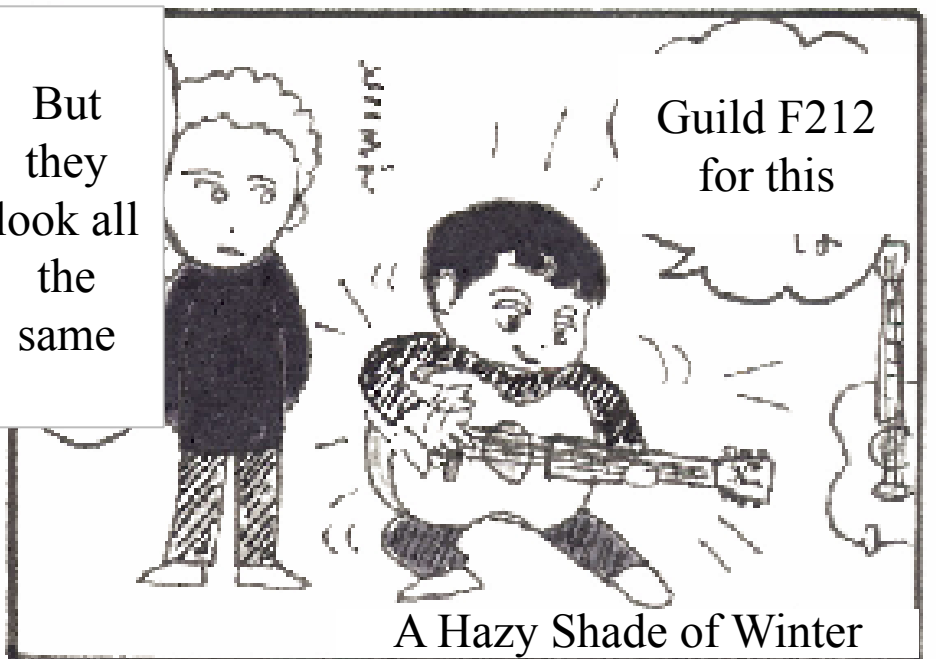
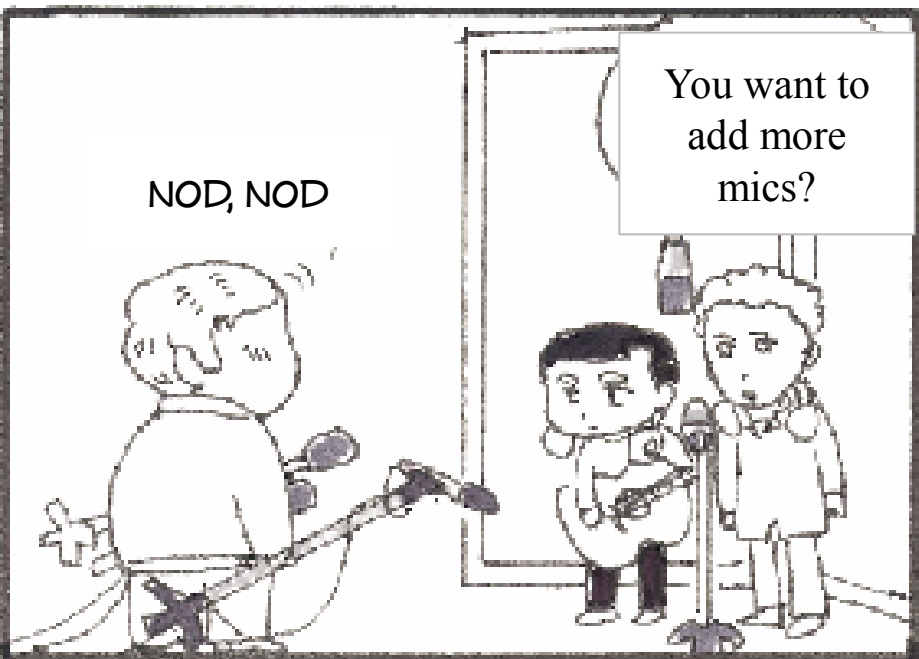
# MOST PECULIAR MAN WITH GUITARS



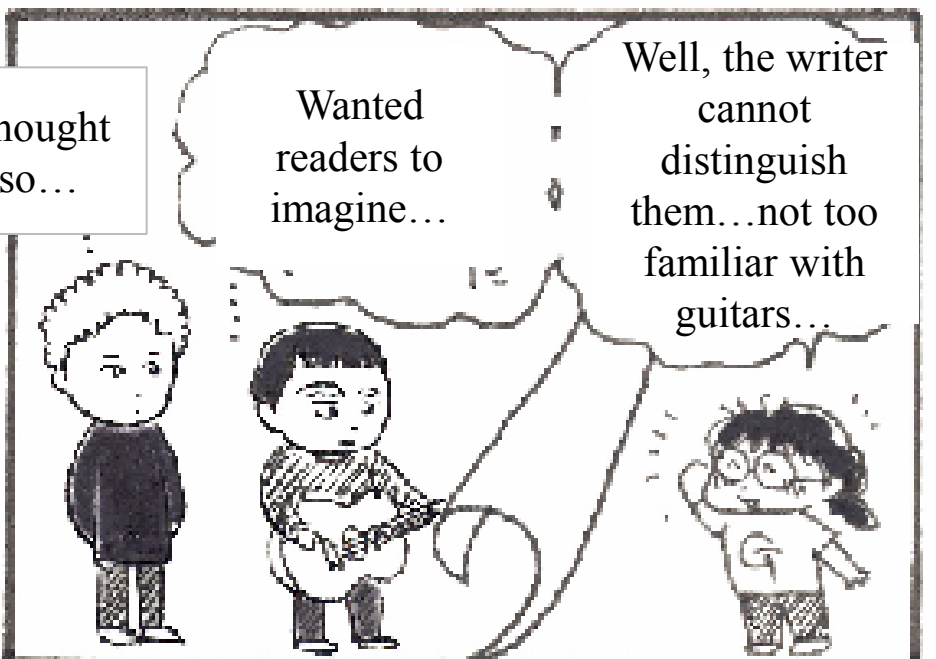
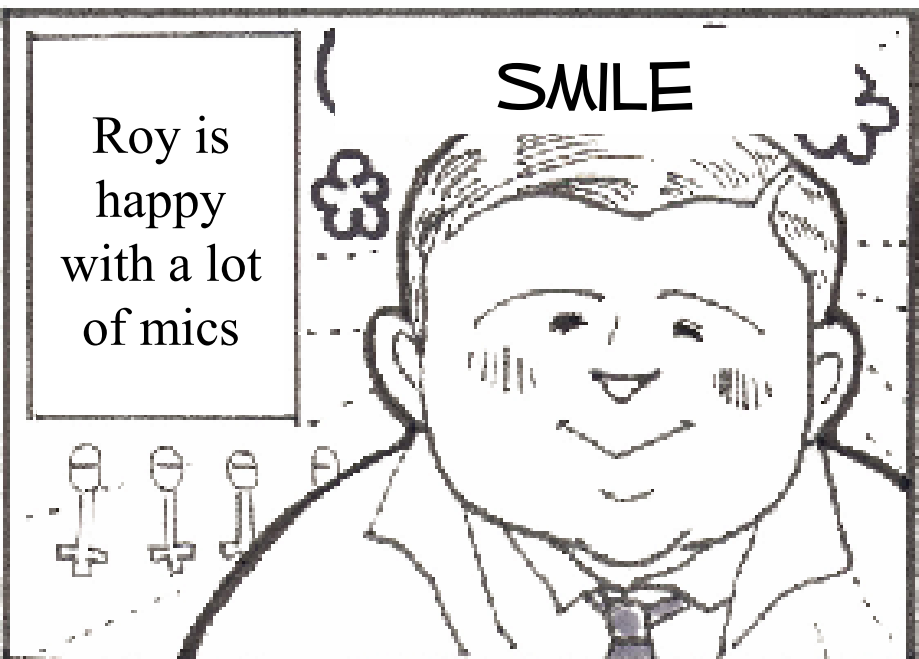
Scarborough Fair



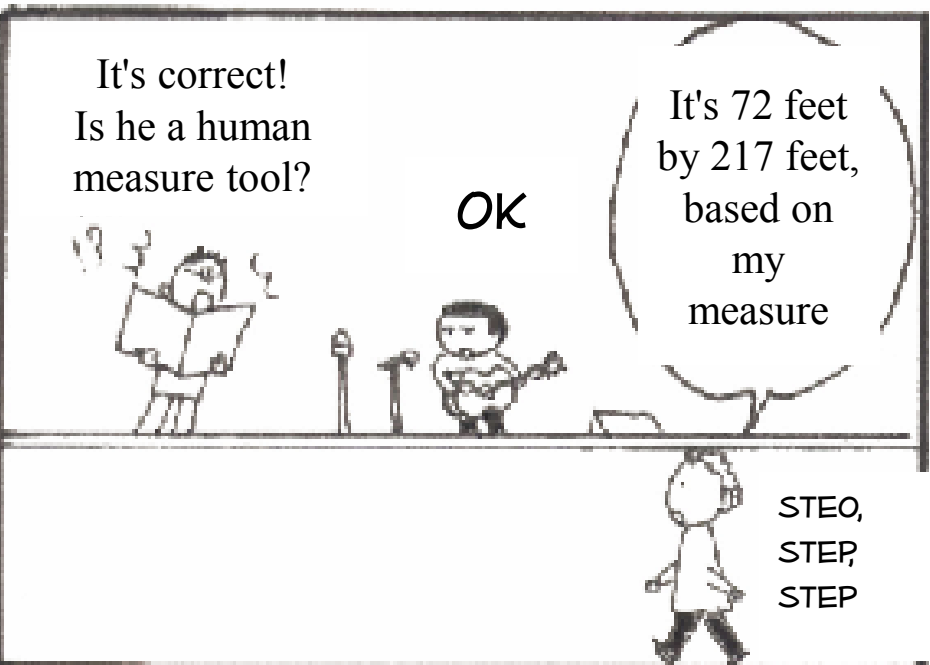
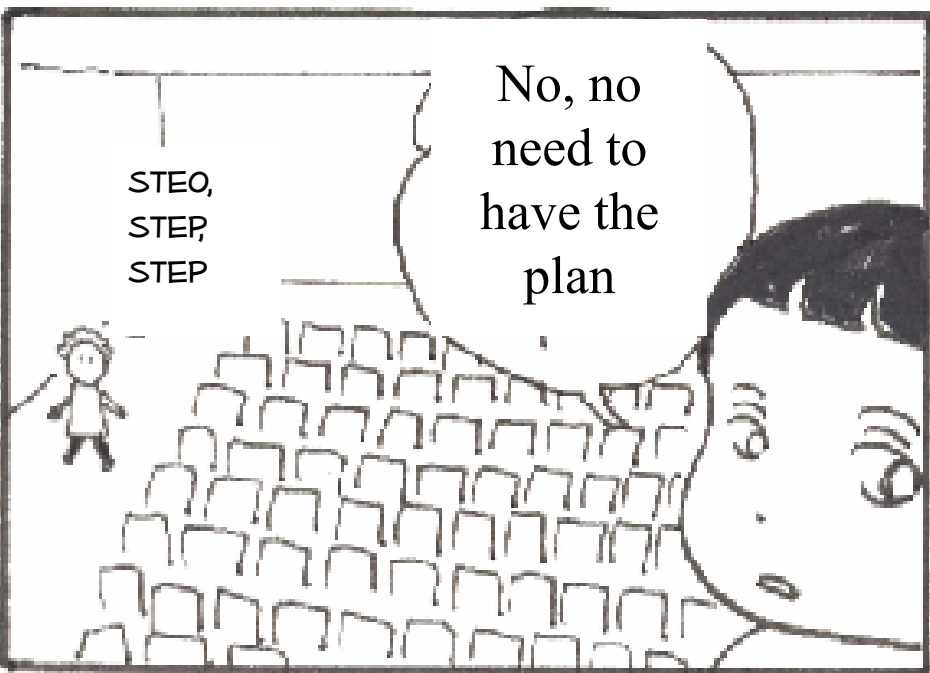
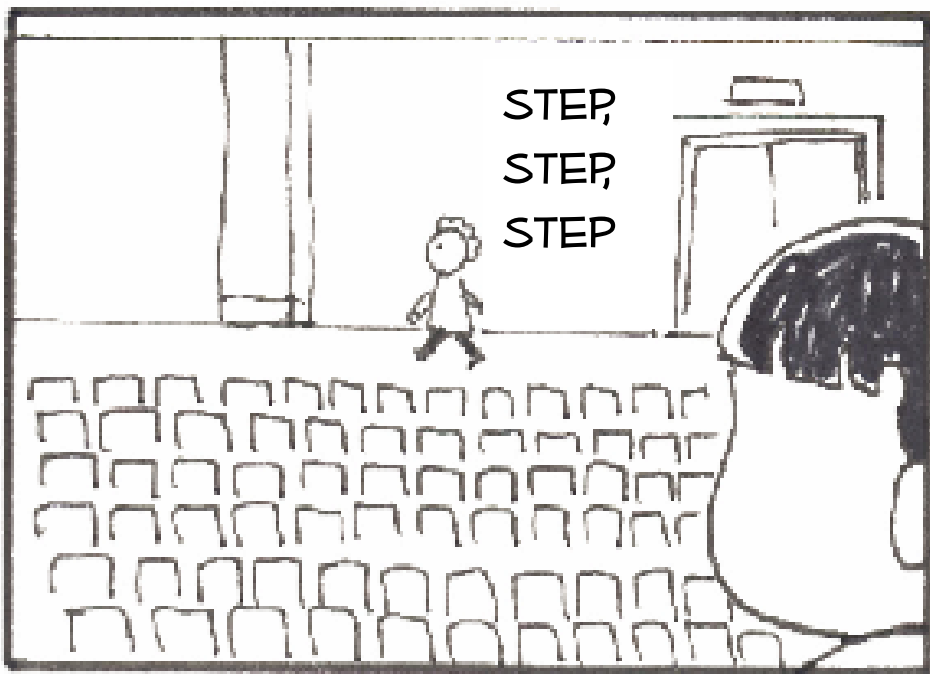
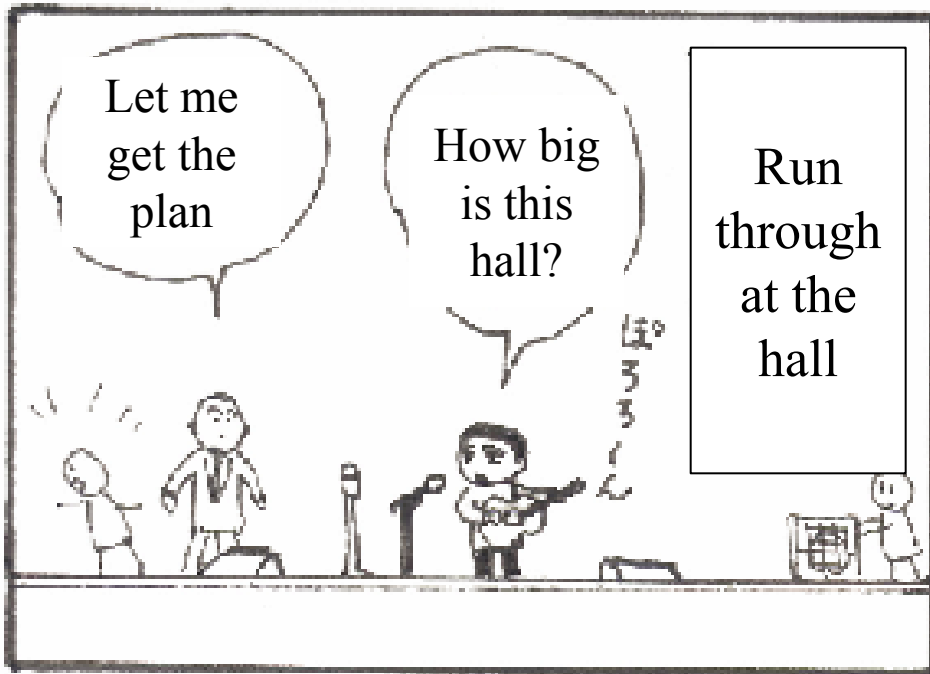
Homeward Bound



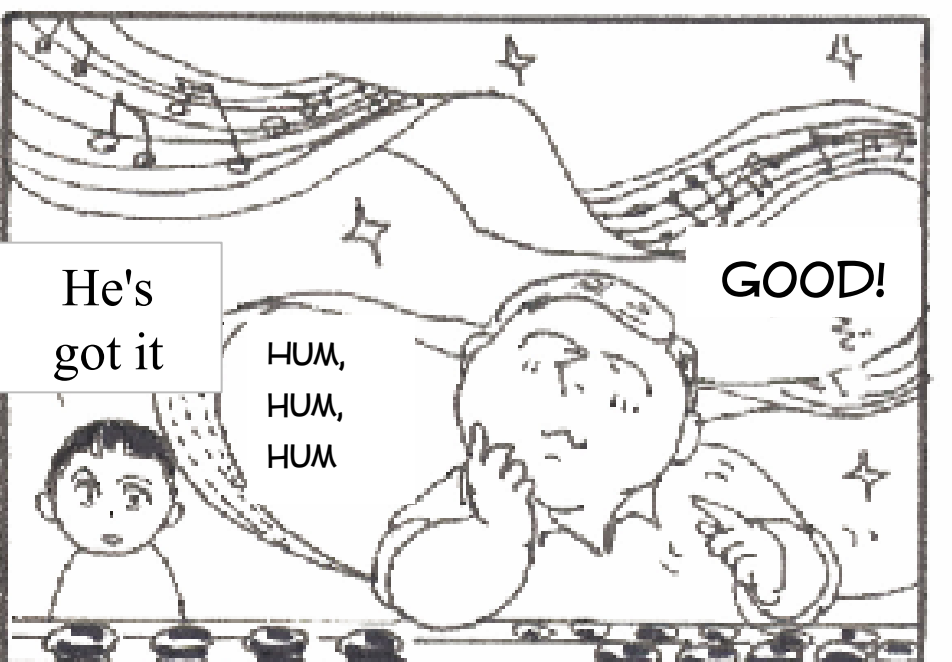
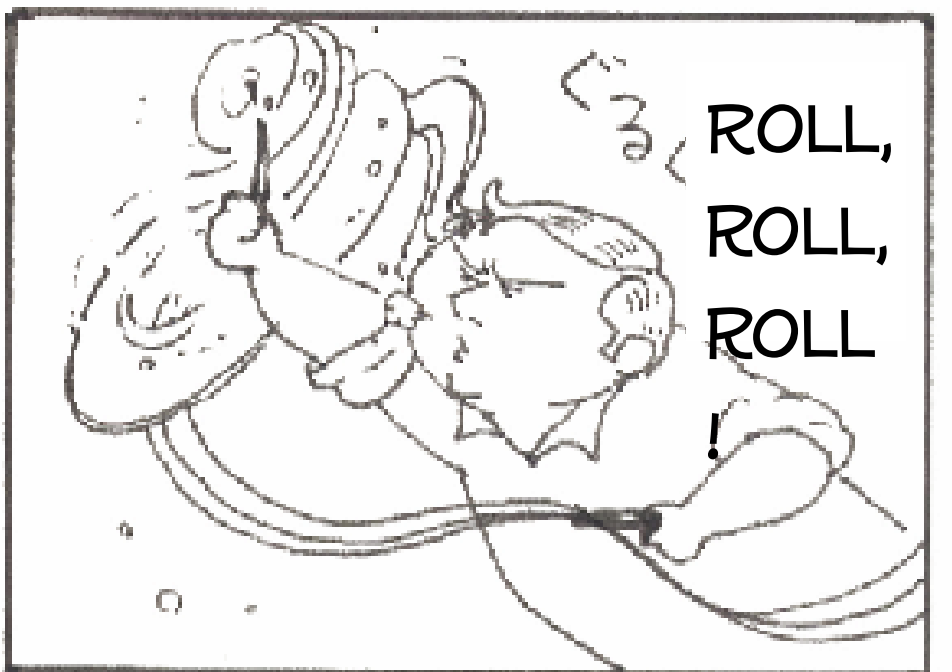
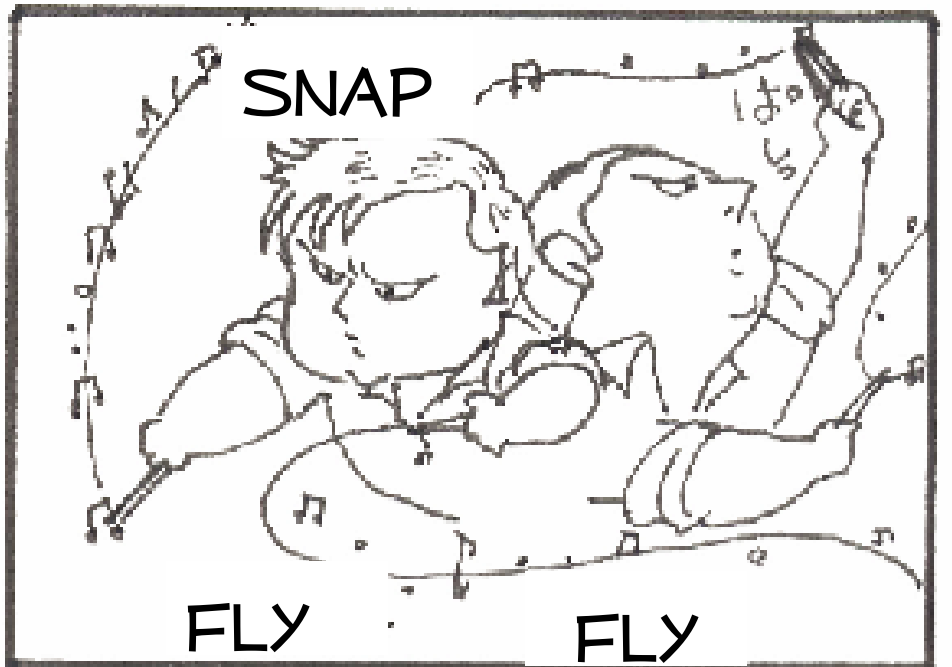
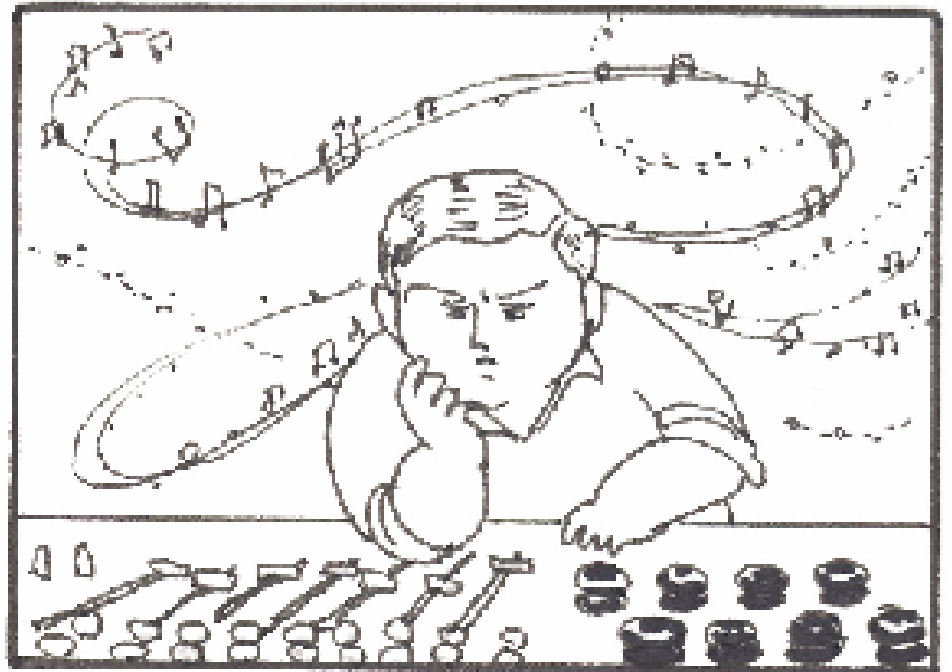
A Hazy Shade of Winter



# ARTIE THE ARTISAN

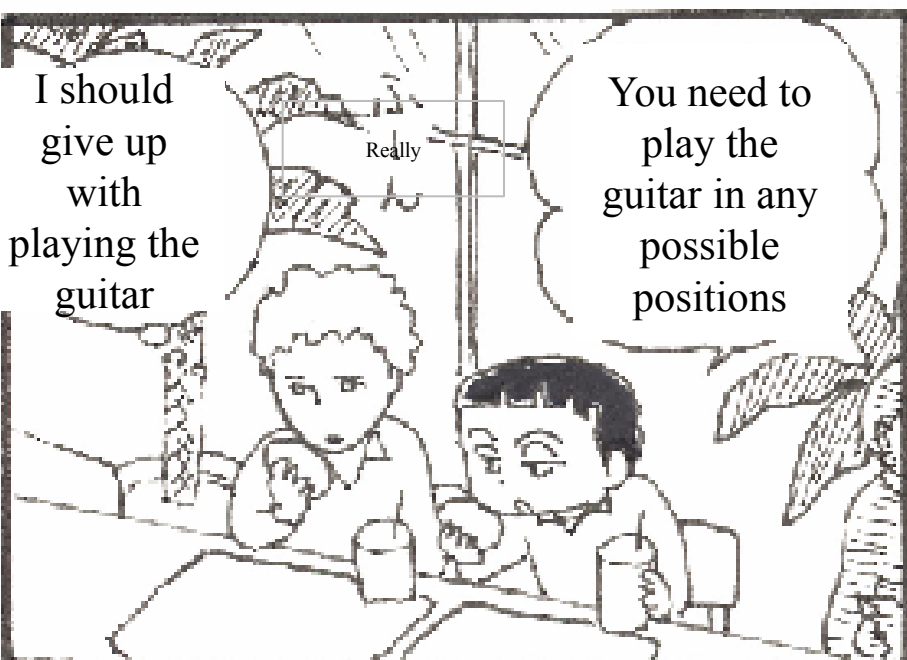
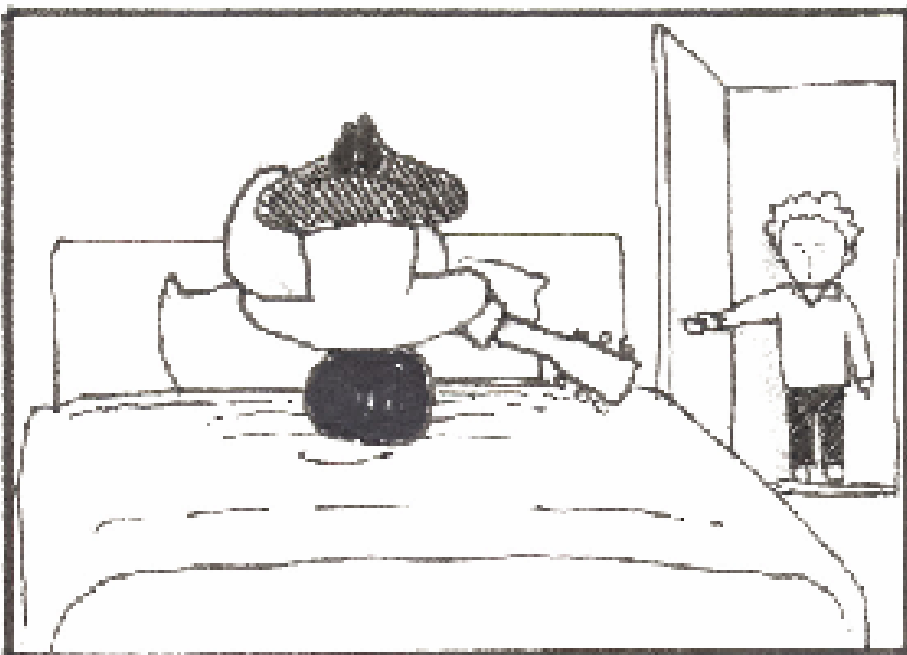
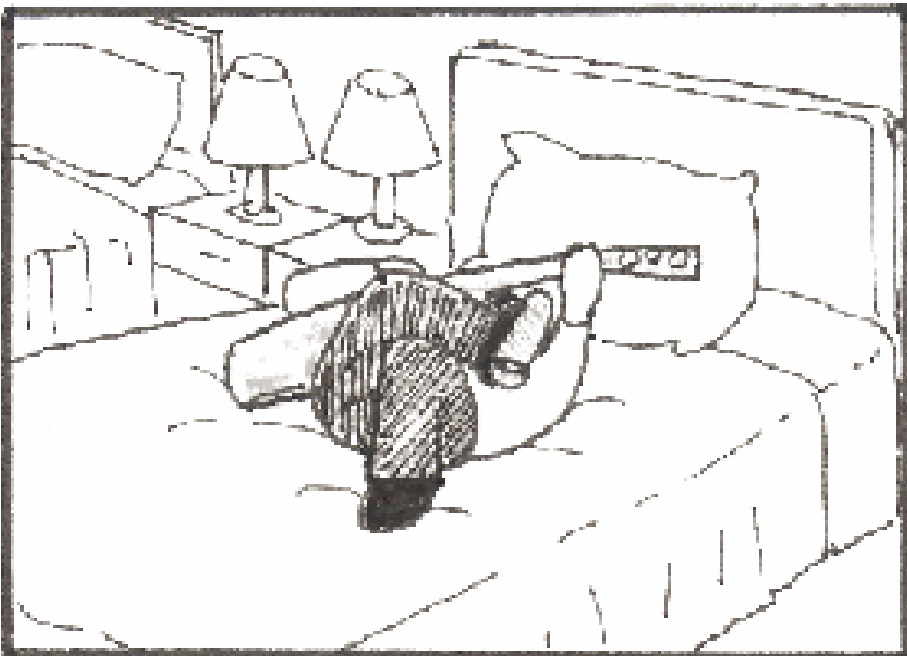
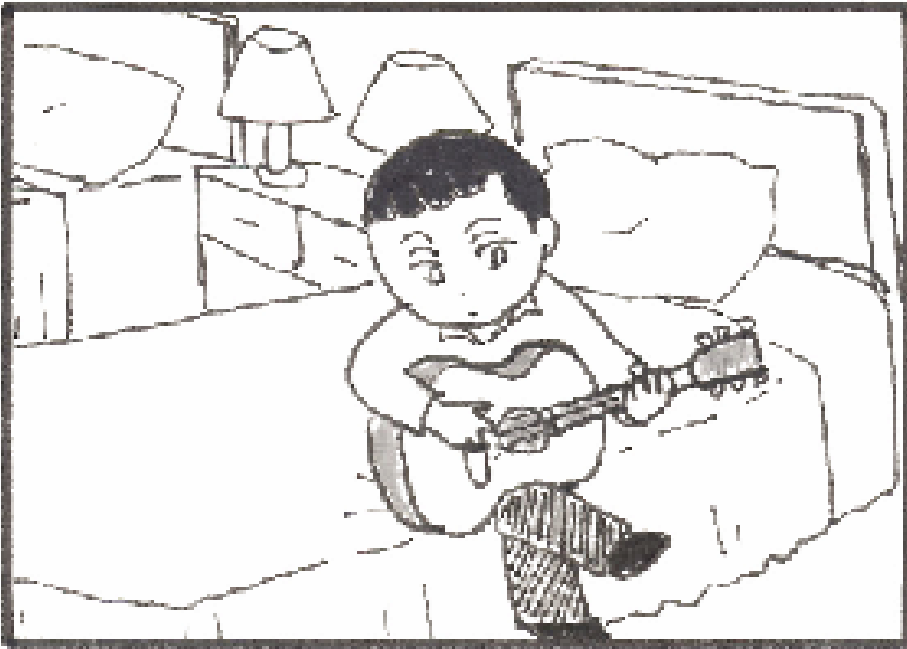


# ROY HALEE THE ARTISAN





PAUL THE ARTISAN

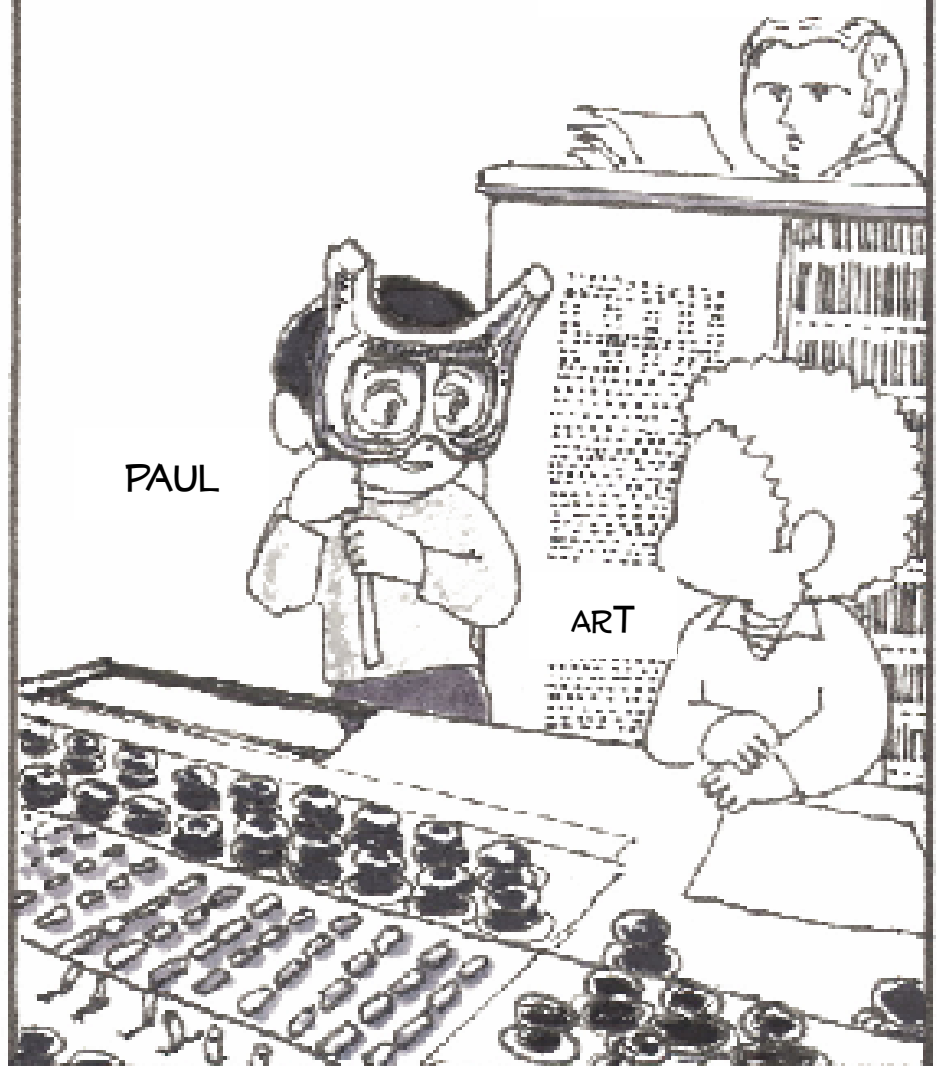


PAUL & ART -  
- DAYS IN  
COMIC  
STRIPS

BY GACHA

TRANSLATED  
BY CHIE

ROY HALEE

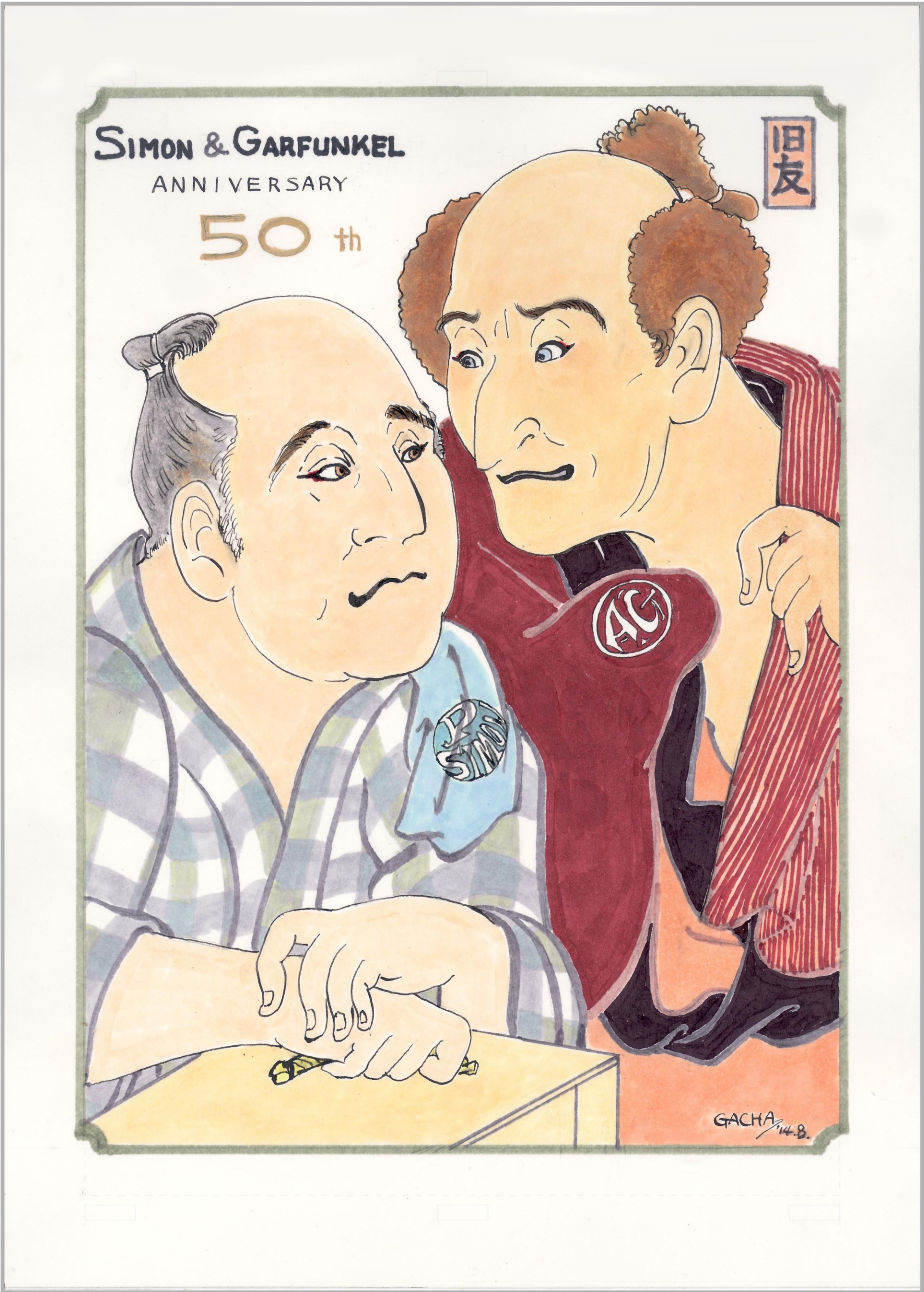


PAUL

ART







**Simon & Garfunkel Web Forum Japan Off-Line Meeting 2014**

<http://www.sandgforum.jp/>